

二〇一二年度 学位請求論文（課程博士）

地域社会の言論空間

—千葉県君津郡『中川村青年会報』にみる村のコミュニケーション—

指導教授 新井勝紘

研究科 文学研究科

専攻 歴史学専攻

氏名 後藤康行

第三章 はじめに 東京と向き合う中川村青年会	三 おわり 村上米蔵のメディア利用	4 3 2 1	ラジ 書籍 雑誌 新聞	7 0 6 4	6 7	二 村民のメディア利用	3 2 1	美的生活 モクラーシー・改造	6 1	1 5 9	一 中川村に伝わっていた流行	第二章 はじめに 中川村におけるメディア利用環境	四 おわり 村上米蔵の経歴	三 『会報』の概要
9 6	8 3	7 9				6 4				5 9	5 8	5 8	4 4 2	3 8

終章	中川村青年会と近代日本	2	2	0	0
一	各章の概略	2	4	0	0
二	言論空間としての中川村青年会が	2	5	1	
三	中川村青年会が現代に問いかけるもの	2	5	5	1
四	近代日本の地域メディア研究の可能性	2	5	8	
図表目次	中川村全図	5	3		
図1	日露戦争凱旋記念式	5	4		
図3	日露戦争凱旋記念式	5	4		
図5	村上米蔵「彰徳碑」	5	5		
表1	中川村歴代村長	5	6		
表2	中川村歴代会長・副会長	1	9	2	0
表3	中川村青年会青年文庫一覽	9	3		
表4	中川村の人口推移	1	2	9	
二	中川村婦人会の設立以後の女性観	2	1	1	4
三	中川村婦人会の活動と婦人会員の意識	2	2	9	
四	中川村婦人会の活動と婦人会員の意識	2	2	9	
おわり	おわりに	2	9		

メディア利用というものが完全に明らかにされてきたというわけではな
 い。ただ、読書に打ち込み、文芸活動を展開することは、その地域であつ
 あつても、事実には、やはり近代日本地域社会には、その地域で上層
 と、いう事実は、や近日常の間にあつた社会は、その地域で上層
 何らかのコミュニケーションを指した山も、地域社会にそうした装置が
 を示している。格差を指摘した山も、地域社会にそうした装置が
 存在している。可能性を否定した山も、地域社会にそうした装置が
 固有のコミュニケーションの形態にあつた。山は、地域社会が持つ
 口頭によるコミュニケーションの形態にあつた。山は、地域社会が持つ
 おいては、町の有力者のみがメディアを通して外部の情報を積極的に
 に入手し、その情報内へ口頭で伝えられない。このように、口の
 報は、有力者から町内へと口頭で伝えられない。このように、口の
 ケーブルシヨンは、地域社会において残らない。このように、口の
 めるような効果は、地域社会において残らない。このように、口の
 僅かながらでも、ケーブルシヨンは、地域社会において残らない。この
 しかながらでも、ケーブルシヨンは、地域社会において残らない。この
 注目に値する。ケーブルシヨンは、地域社会において残らない。この

の地域社会は、小さな共同体である。梁川町でみられたような口頭
なコミュニケーション・システム以外にも、小さな共同体で通用するよう
議ではない。

三 言論空間としての青年会

そこで本論では、近代日本の地域社会には、その地域でのみ通用
していたコミュニケーション装置が存在していたという前提に立ち、
その装置の働きぶりを見てもいくことが、地域社会の情伝達の
あり方とはいかなるものだったのかを解明することを目的とする。
分析の手法としては、有山と同様、特定の地域社会に焦点を当てる。
事例研究の手法をとる。具体的には、千葉県君津郡中川村という地
域に焦点を当てる。中川村には義務教育を
終えた青年たちの団体の詳細は次章で述べるが、中川村には義務教育を
この青年会の会誌として『中川村青年会報』（以下、『会報』と略記
する）が発行されてきた。『ガリ版刷りで、月刊の『会報』は、日露
戦後から日中戦争期といわれ、近代日本が帝国主義国家としての道を
歩んでいった時期に発行されてきたものである。

なので、ここで日露戦後の青年団について分析した先行研究と、本論との関係を確認しておこう。論じるときに、必ず取り上げられるのが日露戦後の青年団について。日露戦争期における増税や、大量の兵力動員に伴う労働力不足などにより疲弊した農村を立て直すべく、日露戦後に内務・文部・農商務の三省を中心展開されたこの運動は、各地に行政村単位の青年団を設立させることになった。日露戦後の国際社会において、日本が列強と並ぶ国家を目指すには、国民の組織化が不可欠だと考えられたからである。民統合として捉えたのが鹿野政直、宮地正人、有泉貞夫による研究である。三氏の研究は、現在においても青年団研究の基礎となつていゝものである。この基礎の発表後は、全国各地に設立された個々の青年団の実態を明らかにしようとする事例研究が数多く登場することになる。例えば、内務省と文部省による青年政策¹。を受けて設立された官製青年団の展開と、それに対抗する動きとして地域社会が自ら設立した自主的¹青年団の展開の双方を論じた芳井研一の研究がある¹。また、「官製的」か「自主的」か、その地域の事情に即した青年団としての軸で、その

組織の存在意義を検討すべきとしたのが及川清秀である¹²。このほか、地域社会、とりわけ農村社会の支配体制を、青年団の活動を通して明らかにしようとした研究などがある¹³。

日露戦後の青年団と限定せず、青年組織という観点でいうと、近世以来の若者組織を「若者中」、「若者仲間」、「若者奉公人」などと分類し、それぞれを地域社会、民俗、戦争などとの関係で論じたのが岩田重則である¹⁴。また、近世以来の若者組織は喧嘩・ヨバイ・博打などを容認するものであるとし、そうした行為を取り締まるため、明治二〇年代に全国各地に誕生した青年組織に焦点を当てた研究もある¹⁵。

さらには、青年団と教育との関係¹⁶、軍隊・徴兵との関係¹⁷、政治との関係¹⁸、関東大震災との関係¹⁹などでも、青年組織は取り上げられてきた。青年組織だけでなく、「青年」という存在自体に注目した研究もある²⁰。

このように、青年組織に関してはすでに多くの先行研究が発表され、この間に、このなかで本論と関連する先行研究といえるのは、やはり日露戦後の青年団を対象とした研究である。本論で焦点を当てている中川村青年会は、地方改良運動が展開されていた時期に誕生している。この誕生時期だけをみれば、中川村青年会は典型的な官製青年団である。だが、及川が指摘しているように、「官製の」か「自主

的「か」といいう議論だけでは、地域社会における青年団の活動を多様であり、実像を正確に捉えることは困難である。青年団の活動は、過ぎない。設立の経緯はその青年団の性質の一面を示している。また、この前記したように、本論は中川村青年会を介して展開された。この情報伝達のあり方に、中川村青年会が重要な指針となる。なぜ中川村青年会が設立されたか、その際には、視点が重要となる。なぜ中川村青年会が設立されたか、その際には、視点が重要となる。なぜ中川村青年会が設立されたか、その際には、視点が重要となる。

2 青年会報の研究
中川村青年会誌として『会報』が発行された。これは、本論のように、青年会報を史料として利用した岡田洋司による研究や、各地の青年団において、青年会報を史料として利用した佐々木浩雄による研究や、愛知県の農村青年のスポーツ受容を分析した岡田洋司による研究や、石川県の農村青年のスポーツ受容を分析した佐々木浩雄による研究などがある²。また、村や青年団が発行していた時報や村報も、青年の意識や地域の行政、産業、教育、文芸活動などを分析する²。

よるこれらの先行研究のなかで、特に本論と視点が近いのが山根拓に
 根の研究は、同地域の時報や村報を、中央政府の政策を反映した教
 化的色彩の強さから、中央（東京）と農村をつなぐ役割を担う空間
 的質を有していた。「小地域メディア」だと言っている²。3。
 りを埋めるものは、時報や村報を地域社会の「メディア」格差の拡
 媛県北宇和郡の人々に中央の情報をもたらし出すコミュニケーション
 置と、役割を果たしている。ケ―シヨン山
 根の研究は、目的意識こそ異なることは描き出し、本論と同一線
 し、いるものだとはいえ、本論と同一線上に位置

五 本論の構成

論序章の最後として、本論の構成を説明しておく。第一章では、本
 論で焦点を当てる中川村、中川村青年会、『会報』編集兼発行者でもあつた村
 中川村青年会の創設者であり、『会報』の編集兼発行者でもあつた村
 上米蔵の経歴についていく。考察の対象となる地域と史料の
 特徴を認める。中川村のメディア利用の状況を考察する。地域社会

の情報が伝達のあり方を解明するには、当然のことながらその地域の
人々がいかにメディアを利用していたのか把握しておく必要がある
からである。中川村と東京との関係を考察する。明治以降、東京
は情報発信地であり、労働や教育の機会を求め、人々が集中する
場所であった。中川村青年会が村民に情報を求めたらすコミュニケーション
場を無視することの役割を發揮するためには、東京は農村の働き手
を吸収してしまふことはできなかつた。しかし、東京は農村の共同
維持するためには接近したくない場所であり、中川村青年会は、
この東京員たちの向き合つていたか。中川村青年会員の東京視察、
や、青年会員たちの東京への意識をみていくこと、中川村と東京
との関係を説明する。村上米蔵と青年会員の対外観を分析する。中川
年會の創設者である村上は、青年会員の終生の教育に
関心を寄せ、成長人物である。村上は、青年会員の終生の教育に
持つ人物を通じて、自身が行くこと、その情報、青年会員は、
「会報」を通じて、自身が行くこと、その情報、青年会員は、
外観を「会報」に発表した。それがよくよくなつた。こうも自分たち
の情報を「会報」に発表した。それがよくよくなつた。こうも自分たち
の情報を「会報」に発表した。それがよくよくなつた。こうも自分たち

社会的地位といふものを明らかにする。関係、さらには村の女性の
 生活と村の意識、この男性の女性観を考察する。
 人々が存在してゐない。中川村には、地域社会の女性を組織した村の
 男性ばかりには、目を向けていゝ。中川村は、地域社会の女性を組織した村の
 第六の明らかに、外観のよきに、両者の天皇観の間には、思想的連関は
 あつたのか、明らかでない。中川村の女性に、焦点を当てる。
 んの様な、イベントで、あつた。中川村や青年会の間には、思想的連関は
 祝行事は、近代日本の根幹である。中川村で、行われたい。
 位の天皇に、ついで、立太子と、中川村で、行われたい。
 の天皇に、ついで、立太子と、中川村で、行われたい。
 た奉祝行事に、焦点を当て、それにより、導き出される。
 コミューニケーション、第四の章に、これを明らかにする。
 示すことには、第四の章に、これを明らかにする。
 同士のコミュニティ、青年会との思想的連関は、中川村青年会を介した
 ぐる村と青年会との思想的連関は、中川村青年会を介した

終章では、各章で導き出された知見の再確認を行い、本論の結論として、中川村青年会という言論空間の存在が中川村にもたらしたものと、何だったのかを明示する。史料の引用に際しては、仮名遣い、以上が本論の構成である。なお、史料の引用に際しては、仮名遣いはそのままとしたが、句読点は適宜補い、旧字体は新字体に改めた。また、図や表は、各章の末尾に掲載した。

- 1 有山輝雄『近代日本のメディアと地域社会』吉川弘文館、二〇〇九年。
- 2 同前「三六〇〜三三七頁」。
- 3 鹿野政直「大正デモクラシーの思想と文化」(『岩波講座日本歴史』近代5)岩波書店、一九七五年)。
- 4 同前。
- 5 大門正克『明治・大正の農村』岩波ブックスレット、一九九二年、五二〜五九頁。
- 6 大門正克『近代日本と農村社会―農民世界の変容と国家―』日本経済評論社、一九九四年、二八三頁。
- 7 前掲有山『近代日本のメディアと地域社会』五三頁、一四七〜一五一頁。
- 8 地域社会の青年組織が村のコミュニケーション活動を支える場

として機能していたことは、大門正克も落合村の事例から指摘して
 いる（前掲大門『近代日本における農村社会』第四章、第五章）。
 鹿野政直「明治後期における国民組織化の過程」（『史観』第六九
 冊、一九六四年三月）、同「戦後経営と農村教育——日露戦争後の青年
 運動について——」（『思想』第五二—一〇号、一九六七年一月）、宮地
 正人『日露戦争後政治史の研究』（『東京大学出版会、一九七三年、有泉
 貞夫『明治国家と民衆統合』（『岩波講座日本歴史』17 近代4 岩
 波書店、一九七六年）。
 ては、当該期の内務省と文部省による青年政策を考察したものと
 して、『金宗植』第六号、地方改良運動と青年政策（『東京大学日本史学
 室紀要』第六号、二〇〇二年三月）がある。『東京大学日本史学
 事例』芳井研一『日本フアシズムと官製青年運動の展開——石川
 本フアシズムと自主的青年的運動の展開——長野県の場合——』（日
 一（三）『人文科学研究』第六〇、六一輯、一九八二年一月、八月、
 一二月）。
 川及清秀「地方における青年会政策とその動向について」（神奈
 川県の事例から——）（『地方史研究』第二八九号、二〇〇一年二月）。
 原里村の事例を中心として（『土地制度史』第一〇五号、一九八四
 年一月）、布川弘「日露戦後の農村社会と地域支配」（『神戸大学史
 学報』第三号、一九八八年）。
 岩田重則『ムラの若者・くにの若者 民俗と国民統合』未来社、

はじめに

置していた村である。一八八九（明治二二年四月一日、町村制の施行に伴い、横田村、百目木村、大鳥居村の三村が合併して誕生した。特に目立った産業はなく、米作と麦作中心の農村であった。この中川村に設立された産業は、米作と麦作中心の農村であった。この点を、これからの詳細に論じていくが、先ず本章では、本論が対象として、この地域の団体、史料である中川村、中川村青年会の創設者であり、『会報』の編集兼発行者でもあった村上米蔵の経歴について確認していく。

一 中川村の地誌的概要

1 横田村、百目木村、大鳥居村の概要
 前述のように、中川村は横田村、百目木村、大鳥居村の三村が合

併して誕生した村である。江戸時代、横田村は幕府に仕える紀州藩士の曾根氏のほか、内藤氏や柘植氏といった旗本一〇〇氏により支配されていた。水田耕作が中心で、村の石高は二一〇〇石、戸数は一七九三（寛政五）年当時で二二一戸であった²。

横田村には、土地を開発した功績が認められたことで、幕府から二〇石が与えられ、苗字・帯刀を許された有力農民がいた。それは近藤家、高浦家、三幣家、内海家、葛田家、積田家、能星家の七家で、「横田の七人士」と称された³。この七家は、明治以降も村の有力者であり続けた。

江戸時代が終わり、明治に入ると、行政制度の変遷とともに、横田村の管轄も変遷していく。一八七一（明治四）年の廃藩置県により、久留里県の管下になるも、同年十一月の府県統合で木更津県の管下となる。一八七三（明治六）年には千葉県の管下となり、大区、小区制に基づく行政区画では、第四大区第三小区に編入された（その後、第四大区第八小区に改編）。一八七八（明治一一）年に郡区町村編制法が制定され、大区・小区制が廃止されると、横田村戸長役場の所轄となった⁴。

百目木村は、江戸時代を通じて久留里藩領であった。藩主は一六〇二（慶長七）年に土屋氏、一七四二（寛保二）年から黒田氏と変わった。横田村と同様、水田耕作が中心で、村の石高は一二四六石

一斗五升二合、戸数は一七九三年当時で七九戸であった。明治以降の行政の管轄は、横田村と変わらなかつた。大區・小區制が廃止された。明治以降は戸長役場の所轄となつた。幕府と旗本の玉虫氏が支配してゐた。水田耕作と畑作がほぼ半々で、村の石高は二一七石一斗九升七合、戸数は一七三年当時で四六戸であつた。明治以降は、小區制が廃止されてから、戸長役場の所轄となつた。

2 中川村の概要

一八八九年四月一日、この三村が合併して中川村が誕生した(図1は、一九四〇年当時の中川村の地図である)。合併前に一つだけ問題となつたのは、農業用の水施設である溜め池の利用についてであつた。横田村と大鳥居村は、合併前は、溜め池と共用して利用してゐた。それが町村制の施行により、溜め池を共同利用してゐない村同士で合併することになつたのである。溜め池を共同利用してゐない村とも、これまでに変わったので、従来の溜め池を利用できる。大鳥居村の方と、これまでに変わったので、従来の溜め池を利用できる。よ、ほかの村とすぐ合意に達したので、合併はスムーズに進んだ。

家も、この地の名家であった。長谷川家、村上家は商業を営んでい
 た。このような名家出身の者のほか、小学校の教員や医師などが村
 の指導者層であった。人口は、一九〇八年当時で現住人口二七六、一
 一五〇年当時から現住人口二七六、一九〇〇年当時は、昭和三
 〇〇年からは、交通は、明治期は海上交通が主流であった。江戸時代
 なかでは少ないほうであった¹。中川村の人口は周辺地域の
 より、木更津は房総と江戸を結ぶ港であり、明治に入ってから木
 更津―東京間の定期汽船が就航して、し、第一次世界大戦
 期の船成金の登場により、定期船が借り上げられて、定期航路は廃止
 網の整備という新たな交通手段の発展も重なって、定期航路は廃止
 となつた¹。²。大正元年一月二日に横田駅が開設された（千
 葉県営鉄道久留里線、一九二三年に国に移管、現在はJR久留里線）。
 木更津駅（木更津線、現在の内房線）は、すでに同年八月に開設さ
 れていたの、これにより中川村―木更津―東京が鉄道により結ば
 れるようになった³。木更津駅までが三〇分ほど、木更津駅か
 ら所要時間は、横田駅から木更津駅までが三〇分ほど、現在でも変

が名を連ねていた¹⁶。また、近藤家と同様に村の名家であった関
 家の関政之助は、一九二七年六月、立憲政友会千葉県支部大会並関
 東大会の準備委員を務めている¹⁷。関は、一九二九（昭和四）年
 から三期にわたり村会議員を務めた村の有力者であった¹⁸。
 このように、改進黨系にしろ、政友会系にしろ、それを支持する
 輪の中心には、村の名家出身の有力者がいたのである。ただ、村長
 を何期も務めた近藤のほうに、村会議員であったので、関よりも影響力が
 強かったため、政治的な対立が発生することなく、改進黨系の支持
 で中川村は安定していたのである¹⁹。
 衆議院議員選挙の選挙権を有する村民の数は、直接国税一〇円以
 上を納めた二五才以上の男性が有権者であった一九一一年末の時点
 では一〇七人（村民の四・四％）、直接国税三円以上を納めた二五才
 以上の男性が有権者であった一九二一年末の時点では
 一七九人（村民の六・五％）であった²⁰。全国平均でいうと、納
 税額の条件が三円に引き下げられる直前の一九一七年（大正六）年当
 時の有権者の割合は二・六％、一九一九（大正八）年に三円に引き
 下げられた直後の有権者の割合は五％を越える程度であった²¹。
 全国平均と比べると、若干ではあるが中川村のほうが有権者の割合
 は高かった。一九二五（大正一四）年の普通選挙法成立以後の、中
 川村の有権者数は不明である。

に出された戊申詔書がある。そこには、「宜ク上下心ヲ一心ニシ、忠
 実業ニ服シ勤儉ヲ治メ」とある。村上米蔵は、ここに示された共
 同一致で勤労に励むという趣意に沿うべく、中川村青年会を組織し
 たのである²⁶。
 このように、中川村青年会は日露戦後の地方改良運動、さらには
 その運動の精神を示した戊申詔書を受けて設立されたものであった。
 それでは、地方改良運動の展開と戊申詔書の渙発の契機となった日
 露戦争は、中川村にとっていかなる意味を有していたのか。
 近代日本にとつて、初めての本格的な対外戦争であった日清戦争
 に、中川村から出征した兵士がいたかどうかは不明である²⁷。し
 かし、その一〇年後の日露戦争には、中川村の人々は確実に参加し
 ていた。中川村では、日露戦争勃発直後の一九〇四（明治三七）年
 二月、当時は郡会議員であった近藤弥三郎と、村長の長谷川良次が
 発起人となり、出征軍人宅の家族を助けるため、恤兵貯金会が組織
 された²⁸。
 また、日露戦後の一九〇六（明治三九）年には、村内の横田神社
 （祭神は天御中主神）に、凱旋軍人のための記念碑が建立された（図
 2）。そこには、凱旋軍人として氏子二六人の名が刻まれている。凱
 旋を記念する式典も開かれており、袖ヶ浦市郷土博物館に収蔵され
 ている「村上勉家文書」²⁹には、中川村で行われた日露戦争凱旋

2 組織構成

総会一九〇九年三月一日、中川村青年会の設立直後に開かれた創立
 ハ本村ニ住居シ、義務教育ヲ終へ、実業ニ従事スル満式拾五歳以下
 ノ青年ヲ以テ組織スルとある³¹。中川村青年会は、村内唯一の義
 務教育機関である横田小学校の卒業生で構成されていた。
 この規約によると、会員が二六才になれば退会となる。しかし、
 翌一九一〇（明治四三）年三月三日、横田小学校にて開催された中
 川村青年会定期総会において規約が改正され、第二条に「但一度会
 員トナリタル者ハ年齢ニ拘ラス会員タルコトヲ得」という条文が加
 えられた³²。これにより、二五才を過ぎても会員は青年会に残る
 ことができた。このため、創立当初は六〇人であった会員数は、大
 正期以降には常に一〇〇人前後の規模を保っていた。退会自体は禁
 止されていたわけではなく、年齢以外の退会理由としては、結婚、
 村からの引越し、入営などがあつた。
 中川村には、大鳥居、上宿、小路、百目木、中下、成蔵、山中と
 いう七つの部落があり、それぞれに青年会の部会が設置されていた。
 会員は、自分が住んでいる部落に設置された部会に所属していた。
 各部会には、責任者として部会長が置かれ、その部会に所属する会

員が就任していた。中川村青年会が設立されてから一〇年ほどは、規約に基づき、青年会の事業の一切を掌る会長には村長、会長を補佐する副会長には横田小学校の校長が就任していた。初代会長は村上米蔵、初代副会長は鈴木巖であった。その後、規約が改正され、役職者の決定方法は、毎年三月か四月に横田小学校にて開かれる青年会の定期総会において、会員による投票で選ばれる選挙制へと変更された。選挙制導入の正確な時期は不明だが、一九一七年四月三日に議決された規約では、まだ選挙制は導入されていなかった。一九二〇（大正九）年四月六日に開かれた第一二回定期総会では選挙が行われ、会長には村上米蔵が、副会長には長谷川若名が選ばれている。そのため、この三年の間で規約が改正されたことは間違いない。そのため、この三年の間で村上米蔵と長谷川若名が選ばれた一九二〇年度以降の歴代の会長と副会長は、表2の通りである。この表は、『会報』を基に作成したものである。選挙が行われていないことが確認できる一九一七年度以前の歴代会長は、村長が就任している中で「表1 中川村歴代会長」を参照されたい。副会長は、選挙制導入までは鈴木巖が務めていた。選挙制導入当初は、副会長こそ当時二六才の長谷川若名が選ばれた。

たもの、会長には初代会長であり、村の有力者である村上米蔵が選ばれた。会長と副会長を若者が担うということに対して、会員たちの気が引けていたのかもしれない。しかし、一九二二年度以降は、会長と副会長のどちらからも、若い青年会員のなかから選ばれるようになった。村上米蔵は会長の退任後も、青年会の活動に関して意見を述べることのできる顧問に就任している。また、長谷川若名は、後に中川村最後の村長に就任している。中川村青年会が村内に居住する若者を集めた組織である以上、この組織で活躍した者のなかから後の村長が誕生するといえるのは当然のことといえるのだが、それだけ青年会が村民の間で認知された存在であったということを表しているともいえるだろう。部長などの役職者は、月に一回開かれる例会で集まり、青年会の活動予定についての話し合っていた。青年会の活動には、東京や近隣の農事試験場などへの視察、会員による演説会、千葉県や君津郡の役人を招いての講演会、運動会、敬老会など様々なものがあつた。また、活動というわけには毎月一〇銭（後に二〇銭に増額）の貯金が義務付けられていた。この貯金は、退会の際に返金された。会長と副会長の選挙のほか、会員の毎年開かれる定期総会では、会長と副会長の選挙のほか、会員の

表彰、一年間の活動報告、決算報告などが行われていた。青年会の
予算は、各部会から徴収する事業費、中川村や中川村農会からの補
助金、国庫債券利子、預金利子、寄付金などにより組み立てていた。
各部会とも、共同試作地として一反歩以上の土地を有しており、そ
の土地で米を生産することを得る利益の一部が事業費となっていた。
予算規模の一例を示すと、一九二〇年度の青年会の支出額は一六〇
円二八銭で、図書購入や『会報』の用紙購入、講演会の開催費、旅
費などに使われた³⁵。

3 基本理念

前述したように、中川村青年会は地方改良運動の基本方針を示し
た。戊申詔書を受けて設立された組織である。そのため、村の共同
致や勤労の奨励というものが組織の目的の根底にはあるのだが、中
川村青年会の基本理念について、もう少し詳しく確認しておこう。
創立総会で議決された規約第四条には、「本会ハ青年ノ風氣ヲ改善
シ、実業ノ改良ニ卒^シ先^シ、誠実勤勉分度推譲ノ美風ヲ養成スルヲ以
ツテ目的トス」とある³⁶。ここでいう「誠実勤勉分度推譲ノ美風」
とは、二宮尊徳の報徳の教えから出てきたものである。留岡幸助や
石田伝吉など、地方改良運動の推進者たちが報徳主義に注目してい
たことはすでに指摘されている通りだが³⁷、中川村にも報徳主義

は浸透していたのである。

二宮尊徳の高弟であった富田高慶は、報徳主義を至誠・勤勞・分度・推讓という四つの言葉に分類し、人々に理解しやすくしたことで、その教えを日本中に広めた³⁸。村上米蔵は、この富田の影響を受け、報徳主義を理解していた。青年会の目的に、「誠実勤勉分度を推讓ノ美風ヲ養成スル」ことが掲げられていたのはそのためである。至誠は、誠実であること。勤勞は、労働に励むこと。分度は、己の分（身のほど）をわきまえること。推讓は、推し譲ること。村上はこれを「愛の発現」であるとし、教育勅語に「博愛衆ニ及ホシ」とあるのが推讓だと述べている³⁹。規約にある通り、これら四つの「美風ヲ養成スル」には、「青年ノ風氣ヲ改善」することが必要となる。そのため、村上米蔵が重要だと考えていたのが禁酒と時間厳守であった。

明治以降の日本では、営業の自由化により酒造家が増えたと同時に、未成年者保護や健康への影響という観点から、キリスト教系の団体や婦人団体などにより、禁酒運動が活発に展開されるようになった⁴⁰。中川村青年会でも、飲酒は「墮落」をもたらすものだと禁酒が訴えられるようになり、第六回定期総会において村上は、青年会員に禁酒を求めた⁴¹。その後、会員に禁酒を求め、記事は後を絶たず、第六回定期総会から二〇年を経た時点でも、

青年会では禁酒の不徹底が問題となっていた⁴²。しかし、いつの世も禁酒の徹底は容易ではない。一三〇年（大正二）に未成年者飲酒禁止法が制定されてからも、多くの未成年者は飲酒を続けていた。また、地域社会の年中行事には、飲酒を伴うものが少なくなかった。正月三が日には屠蘇を酌み、種まきの前のゴメ（四月、苗代に縄を張り表面を平らにする）、田植え後の虫送り（六月）、麦まき後の播種儀礼（十一月）には酒宴を催すことがあった⁴³。中川村で禁酒を徹底しようとするれば、青年会員の生活態度だけでなく、こうした年中行事を改革する必要がある。村上も、そこまですて禁酒を徹底しようとは考えていなかった。『会報』に記事を掲載することで、あくまでも会員たちに自発的な禁酒を促す程度にとどめていたのである。

それでは、時間厳守はどうだったのか。時間厳守という概念は、近代社会の象徴といえるものである。軍隊における集団生活、鉄道の発着、工場での労働、学校の時間割などは、時間厳守が必須であった。この近代的な概念に対する中川村青年会員たちの意識はいかなるものだったのか。

一九一三（大正二）年六月二五日に開かれた中川村青年会臨時総会には、青年会員五九人が出席していた。その内、一五人は集合時間である午前八時に間に合わず、遅刻していた。『会報』には、当日

集合時間を守った会員と遅刻した会員双方の名が掲載された⁴⁴。遅刻した会員は、八時一〇分頃には会場に来ていたのだが、それでも注意を受けることになった。この遅刻した会員たちは、集合時間に対して無関心だったかという、そんなことはない。遅刻した時間は、僅か一〇分である。むしろ、集合時間を意識していたからこそ、これだけの遅刻で済んだといえる。そもそも、午前八時一〇分まで集合時間を意識していなければ、出席者の全員が午前八時一〇分までに集まることなど困難である。それができていたということは、会員たちは時間を把握することが可能だったということであり、会員たちの家には時計が置かれていた可能性が高いということである。この臨時総会から一六年が経過した時点での『会報』には、「時間励行 毎日時計を正しく合せませう」という標語を記した杭を、村内七ヶ所に設置したという記事が掲載されている⁴⁵。時計が村内の各家庭に置かれていたからこそその標語といえる。また、部会によつては、独自に時間厳守の規約を作成するところや、日頃から時間を守っている会員に対して表彰を行うところもあった⁴⁶。禁酒の場合と異なり、青年会員たちは時間厳守への努力を自発的に示していたのである。

禁酒と時間厳守に対する青年会員の間の姿勢からは、青年会とい
う組織と青年会員という個人との間の目的としていた中川村青年会とし
ては、組織として会員に禁酒や時間厳守を求めたわけだが、決して
強制はしていない。もちろん、青年会に強制力が存在しないか
たという点ではない。時間厳守の場合でいうと、『会報』が会員に
配布されていいる以上、そこに遅刻した者の名が掲載されるとい
とは、会員たちには時間厳守への無言のプレッシャーがかかるというこ
たと考えるべきである。
しかし、時間厳守の場合と異なり、禁酒の場合には、飲酒が原
因で喧嘩した会員の名は掲載されていなく、『会報』には、飲酒が実
際にいたかどうかは別にして、禁酒を訴える標語なども掲載されて
いない。禁酒は望ましいが、あくまでも自発的な禁酒が会員には求
められない。禁酒の望ましいが、あくまでも自発的な禁酒が会員には求
けられたい。守らなかつたが、時間は守ろうとした。
このように、組織と個人との間でバランスのとれた関係構築し
ていくことので、中川村青年会は「美風ヲ養成スル」ことの実現を目
指している以上、実際には両者を分けることなどできない。多く構成さ
れている以上、実際には両者を分けることなどできない。多く構成さ

年会員が禁酒は無理でも時間なら守れるということを考えていたの
であらば、青年会が禁酒よりも時間厳守の徹底に向かうのは当たり
前であつた。
ただ、組織は常に構成員のためにも動くわけではない。組織の活動を円滑に進め
員は常に組織のために構成員との間でもバランスの活動を円滑に進め
るためには、組織と構成員との間でもバランスの活動を円滑に進め
ていることが重要であることはいうまでもない。中川村青年会と青
年会員との間には、そのバランスのとれた関係が築かれていたこと
がある。だからこそ、青年会で活躍した者は、村民の支持を得ること
が可能となり、後に村長に就任することもできたのである。

三 『会報』の概要

中川村青年会の会誌である『会報』は、一九〇九年五月一日に
第一号が発行された。編集兼発行者は、村上米蔵である。ガリ印刷
りで、毎月発行された。編集と発行を行っ
ていたので、村上が体調を崩したときや、関東大震災で中川村が被
災したときなどは休刊していた。
第一号は、『中川村青年新聞』という名称であつた（図4）。第三
号から、『中川村青年会報』となる。名称変更の理由は不明だが、中

川村青年会の会誌である以上、青年新聞よりも青年会報のほうが妥当だと村上が考えたのかもしれない。

第八〇号から第九五号までは、『青年修養会報』という名称で発行されてきた（このときの改称の理由については後述する）。一九一七年八月、村上は二男の治が牧師として活動していた朝鮮の新義州にある朝鮮燐寸会社の役員に就任することになり、日本を離れることになったので、『会報』は第九五号をもって休刊となった。

一九一九年一月、村上は帰国し、翌一九二〇年四月六日に開かれた中川村青年会第一二回定期総会にて選挙で会長に選ばれると、村上是『会報』の発行を再開した。再開後の最初の号である第九六号は、同年四月二〇日に発行され、名称は『中川村青年会報』へと戻された。以後、『会報』の発行は、一九三九（昭和一四）年六月一日発行の第三〇七号まで続けられていたことが確認できる⁴⁷。

『会報』は、青年会員に配布されたほか、近隣の村の青年団や中川村出身の入営兵士などにも郵送されていた。印刷部数は、毎号二〇部ほどであった。編集と発行は全て村上が担っていたが、青年会の会誌なので用紙の代金や郵送料などは青年会の予算で賄われていた。毎号四頁から一〇頁ほどで、第一号から第四号までは一枚二頁の二段組み、第五号から第八号は一枚二頁の二段組み、第九号以降は一枚二頁の二段組み、第五号から第八号は一枚二頁の二段組み、第一三九号以降は一枚二

頁の三段組みという紙面構成であった（例外の号もある）。
記事の構成は、ほとんどの号が多かった。論説から始められた。村上
の論説は、道徳的な内容のものが多い。報徳主義を支持して、
ただけなく、キリスト教徒（プロテスタント）であった村上は、
仰心を大事にしており、会員たちにはどのような宗教であれ、
心が大切だということとを訴えていた。道徳的なもの以外には、
問題や農村振興策などについて論説があった。以外には、時事
村上の論説は、執筆者である村上自身の名前が明示されていない
ものである。時には家族が『会報』の編集を手伝うことはあった。
『会報』が村上一人の手によって発行されていることを、青年会員
たちは知っていた。そのため、村上は論説の執筆者として自身の名
前を明示する必要がなかった。論説以外の記事でも、執筆者の名前
が明示されていないものは、村上が書いたものであった。寄稿され
た原稿の場合には、執筆者名が明示された。青年会の活動に
冒頭の論説に続いて掲載されるのは、青年会の活動に
事であった。例えば、各部会の共同試作の成績表、会員の貯金表、
例会での議決事項などである。また、その様子や掲載された。定期総
説会などが行われていた場合は、その様子が掲載された。定期総

は毎年三月か四月に開かれていたもので、四月号と五月号には定期総会の様子、一年間の会の活動報告、決算報告、予算案などが掲載された。定期総会では、来賓として出席した千葉県や君津郡の役人が講演を行うことがあり、その講演が掲載されることもあった。会員から寄稿は、常時受け付けていた。会員の寄稿は、論説だけなく、東京視察や千葉県主催の講習会などへの参加記録、自作や徴兵検査の対象である会員の氏名なども掲載された。『会報』は、概ね会員たちが好評であったが、一度だけ会員からの新たな活動として、「清遊会」という催しを開こうとしたときに出てきた。清遊会は、「青年の元気を旺盛にし、併せて精神修養に裨益を与へん」とすることを目的に開催が決まったものである⁴⁹。清遊会の内容は、演説会や講演会などの余興で半日を過ぎすというものであった。

この新たな催しを開く際には、役員の間で問題となったのが予算であった。役員たちの会議では、寄付を受けるといった意見が出たが、外部の人間に依存してまで開くことに反対意見が出て却下された。そこで解決策として浮上したのが、『会報』の発行を止め、その費用を清遊会にまわすという案であった。『会報』の発行には、用紙代や

郵送代などで年間一二円程度費やされていた。廃止と続行の意見は半々であったが、結果は廃止となった⁵⁰。これにより『会報』は、第八〇号をもつて『青年修養会報』と改称されることになった。内容自体に変化はなかったが、青年会の予算ではなく、村上が自費で発行を続けることになったので、改称された。その後、村上が日本を離れることになったため、『会報』は第九五号をもって休刊となるが、村上が帰国すると発行はすぐに再開された。再開後は『中川村青年会報』という名称に戻されているので、当然ながら発行の費用は青年会の予算で賄われた。結局、清遊会は青年会の活動として定着しなかった。村上の不在に伴う『会報』の休刊は、結果として『会報』の必要性を会員たちに再認識させるきっかけとなった。以後は、『会報』の廃止を求め、声が会員のなかから挙がることはなく、むしろ会員による論説の掲載が目立つようにならなくなっていった。『会報』は、村上の独りよがりで作られていたのである。

四 村上米蔵の経歴

中川村青年会の創設者であり、『会報』の編集兼発行者でもあった

村上米蔵は、一八六四（元治元）年、呉服小間物雜貨商を営んでいた村上友次郎の長男として生まれた^{5.1}。横田村の部落である小路の出身であった^{5.2}。村上家は、「横田の七人士」のように江戸時代初期からこの地で続く家柄というわけではなかったようだ^{5.3}。村上には若くして家業を継ぎ、商売は順調に進んだ。中川村における衆議院議員選挙の有権者数については前述したが、村上は直接国税一〇円以上の納税者が有権者とされる時点で、すでにその一人として名を連ねていた^{5.4}。

性格は、好奇心旺盛な気質だったようで、木更津にキリスト教が伝わると、教えの内容を知らずに反対するのはよくないと考え、わざわざ徒歩で木更津まで行き、礼拝に参加している。それがきっかけとなつて、キリスト教に関心を抱くようになり、一八八九年（一八九二年の可能性もある）に洗礼を受けた^{5.5}。

商人として成功を収めていた村上は、村政を担うようになり、一八九二（明治二五）年には村会議員に就任、一九〇六年には一期四年間村長の職を務めた^{5.6}。この村長時代に中川村青年会を設立し、『会報』の編集と発行を始めることになる。

村上は、一九四三（昭和一八）年に亡くなっている。亡くなる数年前まで、『会報』の発行を続けていたのである。人生の晩年になつても『会報』の発行を続け、青年会の顧問は終生務めた。それだけ、

将来の村を担う若者に対する村上の思い入れは強かったということである。⁶ 若くして家業を継いだ村上自身は、教育を受ける機会に恵まれていたわけではなかったのだが^{5,7}、若者の教育には関心があり、横田の教会では毎週日曜学校を開いていた⁸。村の若者を集めた中川村青年会の設立は、そのきっかけこそ国家の主導による地方改良運動であったが、村上の個人的な思いとも合致していたものであったといえる。青年会の設立後は、家業の経営を長男の孔克に任せていたのである。もはや村の若者の教育は、村上にとってライフワークとなつたのである^{5,9}。

なお、長年にわたり『会報』の発行を続け、青年会の発展に尽力した村上の治績を顕彰するため、一九四〇年十一月五日に「彰徳碑」が建立された。この碑には、『会報』の発行は「実二三百七号ニ及ヒ」と刻まれている。碑は、袖ヶ浦市横田の中下公会堂敷地内に現存している（図5）。

おわりに

江戸時代から存在していた横田村、百目木村、大鳥居村という三村は、近代国家による地域再編政策である町村制の施行という上か

の力をよって合併させられ、行政村である中川村として新たな道
 を歩みだすことになった。合併後、この旧三村出身の者たち間の
 目立った軋轢が生じることはない。また、経済的対立、政治的
 対立、思想的対立など、どれも発生していれば、共同体としての秩
 序を揺るがすことになりかねない。中川村では発生しな
 かった。そういう意味では、中川村はあまりにも「平凡」な農村で
 特注に値しない地域といえる。しかし、青年会に注目
 は中川村に焦点を当て、この村に存在していた中川青年会に注
 す。それは、中川村という地域社会の情報伝達のあり方を考
 るためだが、中川村が「平凡」な農村であり続けた原因を探るた
 めである。結論を先に述べると、中川村青年会が存在し、『会報』が
 発行されてきたこと、中川村のなかで深刻な対立が発生すること
 の防止、この中川村青年会の実
 動を支える言論空間と本論において、中川村の防いでいた
 態を明らかにし、最終的にはこの結論が実証されてきているこ
 とだろ。

1 中川村は、一九五五年には平岡村と合併して平川町となり、一九
 七一年には袖ヶ浦町と合併した。町名は袖ヶ浦町の名が残り、一九
 九一年に現在の袖ヶ浦市となった。
 2 袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史料目録「1」』袖ヶ浦市教
 育委員会、一九九五年、二四〇～二六六頁。
 3 山田伸男「先見の人・近藤弥三郎」(『袖ヶ浦市史研究』第八号、
 二〇〇〇年三月)。
 4 前掲袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史料目録「1」』二六頁。
 5 袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史料目録「4」』袖ヶ浦市教
 育委員会、一九九七年、一八〇～一九九頁。
 6 同前二一〇～二二二頁。
 7 袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史 通史編 3 近現代』袖
 ケ浦市、二〇〇〇年、五三頁。
 8 「会報」(『会報』第三八号、一九一二年六月二五)。
 9 前掲袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史 通史編 3 近現
 代』一五〇～一五二頁。
 10 前掲袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史料目録「1」』三二
 〇～三三二頁。同『袖ヶ浦市史料目録「4」』二〇頁。
 11 中川村の人口については、「中川村の概要」(東洋大学渡辺新ゼ
 ミナール編集・発行『近代日本の農村青年―千葉県中川村青年会の
 思想と活動』二〇〇二年七月)の執筆者である古宮千恵子氏より
 統計資料の提供を受けた。

5	5	5	5	会道一
9	8	7	6	一教九
前	前	前	前	○会一
掲	掲	掲	掲	○に七
村	村	村	年	合年
上	袖	上	袖	々併当
淑	ケ	淑	ケ	表〜時
子	浦	子	浦	にで
氏	市	氏	市	。所村
、	史	、	史	属上
大	大			し米
日	通	日	通	て蔵
方	史	方	史	いと
幸	編	幸	編	た同
子	3	子	3	のじ
氏	氏			はく
か	近	か	近	一横
ら	現	ら	現	六田
の	代	の	代	人伝
聞	聞	聞	聞	で道
き	三	き	三	あ教
取	八	取	八	る会
り	六	り	七	(前
よ	り	よ	頁	同
り	三	り	。八	掲年
	。八			、
	七			木木
	頁			更更
	。			津津
				教伝

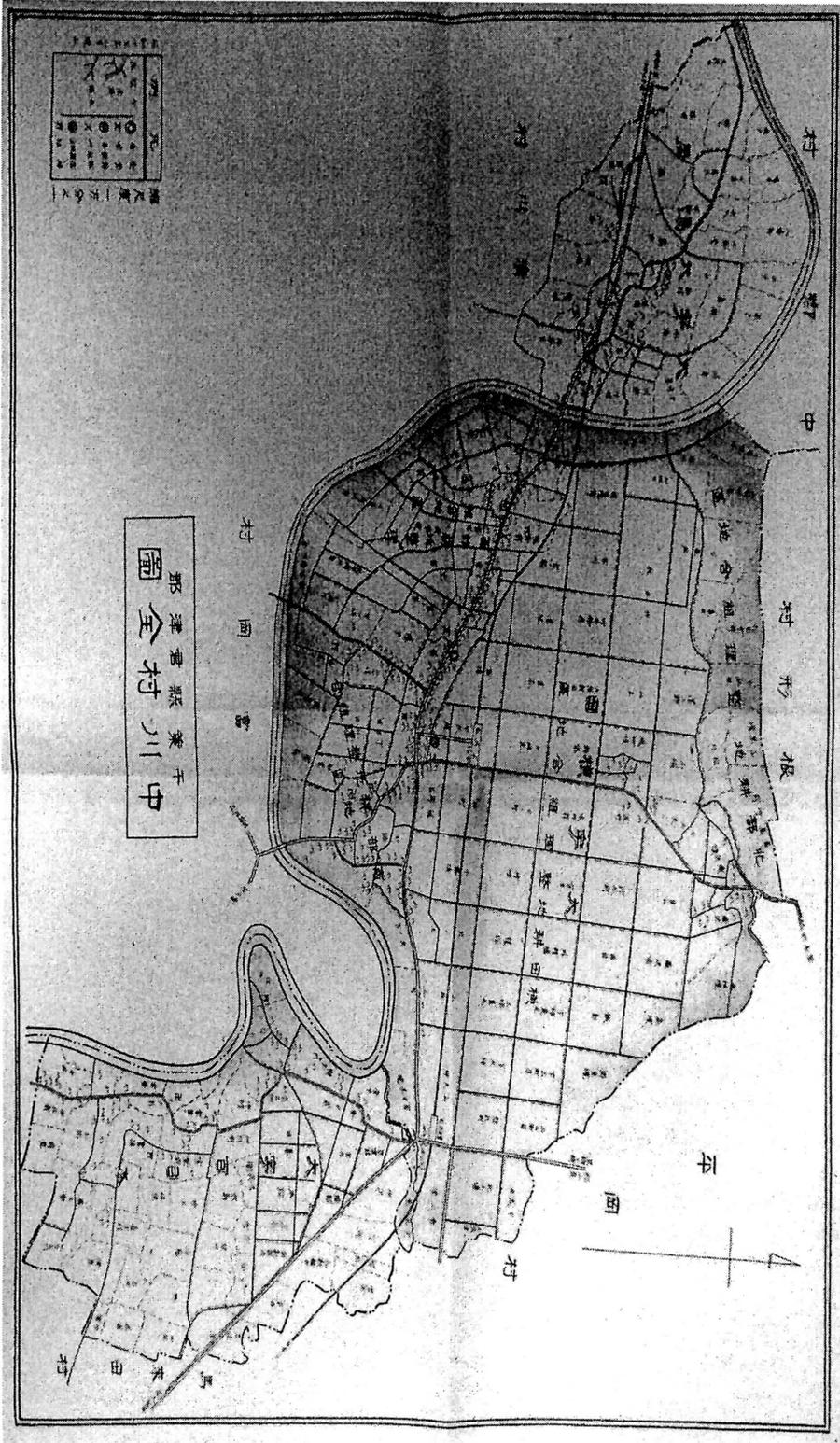


图 1 中川村全图 (出典：野口秀昌編『千葉県津野郡中川村地籍地図』大日本地図学会、1940年)



図2 日露戦争凱旋記念碑（横田神社内、筆者撮影）

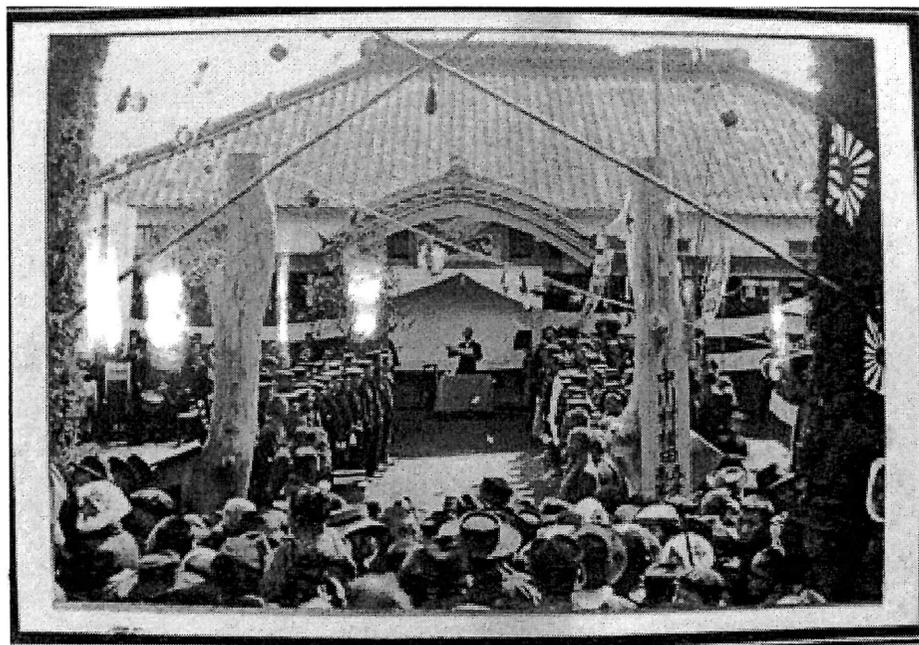


図3 日露戦争凱旋記念式（会場は横田小学校）

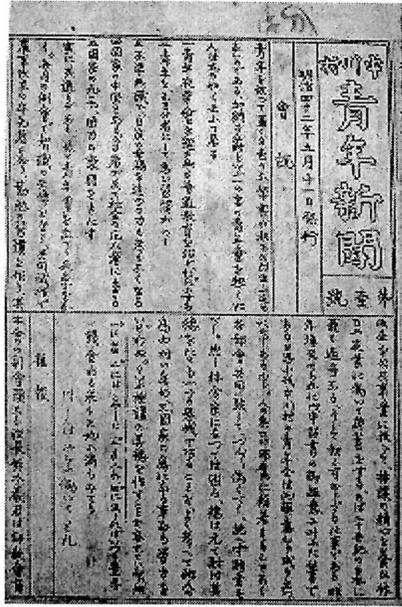


図4 『会報』第1号(1909年5月11日)

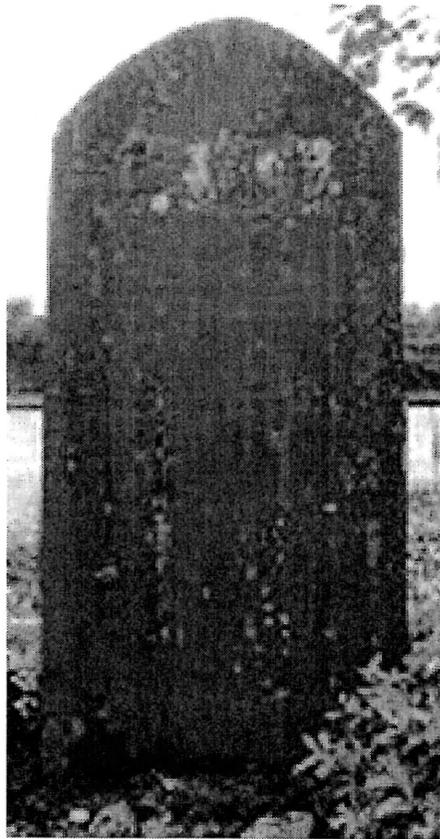


図5 村上米蔵「彰徳碑」(中下公会堂内、筆者撮影)

表1 中川村歴代村長

代	氏名	住所	在任期間
1	池田 莊助	横田	1889・6・11～1891・12・16
2	鶴岡 音次郎	百目木	1891・12・16～1895・12・15
3	鶴岡 音次郎	百目木	1895・12・16～1896・2・11
4	葛田 恒	横田	1896・4・1～1899・2・8
5	関 留次郎	百目木	1899・2・8～1899・8・25
6	近藤 弥三郎	横田	1899・9・15～1902・1・26
7	長谷川 良次	大鳥居	1902・2・12～1906・2・11
8	村上 米蔵	横田	1906・2・22～1910・2・21
9	積田 岩次郎	横田	1910・3・3～1913・6・10
10	積田 喜四郎	横田	1913・6・18～1917・6・17
11	関 賢治	百目木	1917・6・20～1921・6・19
12	近藤 弥三郎	横田	1921・9・29～1922・3・8
13	近藤 弥三郎	横田	1922・7・27～1926・7・26
14	近藤 弥三郎	横田	1926・7・27～1928・3・8
15	長谷川 良次	大鳥居	1928・4・27～1932・4・26
16	能星 善光	横田	1932・5・4～1934・4・26
17	吉田 岩司	横田	1934・7・9～1938・7・8
18	近藤 謙蔵	大鳥居	1938・7・9～1942・4
19	内海 保三	横田	1942・4～不明
20	内海 保三	横田	不明～1944・2・29
21	見富 弁六	大鳥居	不明
22	長谷川 若名	大鳥居	1947・4・5～1951・4・4
23	長谷川 若名	大鳥居	1951・4・5～1955・2・10

袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史 通史編3 近現代』
 (袖ヶ浦市、2000年、578～579頁)より作成。

表2 中川村青年会歴代会長・副会長(1920年度以降)

年度	会長	副会長
1920	村上 米蔵	長谷川 若名
1921	村上 米蔵	長谷川 若名
1922	溝口 光顕	齊藤 茂夫
1923	溝口 光顕	齊藤 茂夫
同上	山口 慶蔵	鶴岡 兵蔵
1924	山口 慶蔵	鶴岡 兵蔵
1925	鶴岡 兵蔵	吉田 修一郎
1926	宗政 保	能星 光一
1927	能星 光一	大野 栄
1928	吉田 修一郎	関 清
1929	金子 政次	若林 富世
1930	金子 政次	宇佐美 三郎
1931	相川 十三	田嶋 金治
1932	小川 重道	吉田 一郎
1933	吉田 一郎	村上 勉
1934	村上 勉	近藤 英
1935	不明	不明
1936	不明	不明
1937	不明	不明
1938	不明	不明
1939	中山 文吉	近藤 繁雄

注

- ・1923年度は、溝口会長宅が関東大震災により全壊したため、溝口は復旧に専念することを理由に退任した。副会長も同様に退任したので、2人の後任として、山口と鶴岡が急遽就任することになった(『会報』第134号、1923年11月15日)。
- ・1929年度は、相川雅男が副会長に当選したのだが、相川は当選直後に腸チフスで亡くなったため、次点の若林が副会長に就任した(『会報』第198号、1929年7月15日)。
- ・1929、30年度の会長金子政次は、『会報』に「金子政治」と記されている場合もあるのだが、金子自身が投稿した記事の投稿者には「金子政次」と記されているので、「政次」とした。
- ・1935～38年度は、選挙結果が記された『会報』の号が現存していないので、不明である。
- ・1939年度は、千葉好胤が副会長に当選したのだが、千葉が召集されたため、役員のための選挙で近藤が選ばれた。

て、情報が掲載されたメディアを利用するというのがあり、
中川村の外で生まれたメディアに関する情報が『会報』に掲載され
いたのだから、流行が中川村に伝えられることを可能にした経
路というものが必ず存在するはずである。その経路を解明するため
には、村民のメディア利用環境の把握が重要になってくることはい
うまでもない。
以下、本章では次の三点について述べていく。一点目は、『会報』
に掲載されたいた流行に関する情報とは、具体的にはどのような内
容のものだったのかという点について。二点目は、中川村の人々
のメディア利用環境について。三点目は、『会報』の編集兼発行者で
あった村上米蔵個人のメディア利用環境についてである。

一 中川村に伝わっていた流行

1 怪盗ジゴマ

明治の末から大正の初めにかけて、大流行した映画（活動写真）
に「怪盗ジゴマ」がある。盗賊を主人公にしたこのフランス映画は、
当時の子どもたちを熱狂の渦に巻き込んだ。あまりの人気の高さ
に、教育上悪影響を及ぼすとして、警視庁が上映を禁止させたほどであ
る¹。

一九世紀末に日本に入ってきた映画は、日露戦争を記録した映画が興行として成功したことがきっかけとなり、人々の新たな娯楽として定着した。その後、映画は産業としても成長していき、昭和に入ると、映画は国民的な娯楽となっていた。ジゴマは、日本の映画史において、草創期を代表する洋画の一つであった。

ジゴマの全国的な人気を支えていたのは、弁士による地方巡業と、ジゴマ関連の小説であった。「頗る非常」というフレーズを多用することから、「頗る非常大博士」の異名で知られた弁士・駒田好洋は、全国各地でジゴマの巡業興行を行っていた。駒田の巡業興行は、この地域でも連日大盛況であったという。

弁士による巡業興行を、劇場で観ることができなかった人たちは、小説を読むことで、ジゴマを楽しんでいた。当時は、ジゴマを登場させた関連小説が多数刊行され、出版界において一つのジャンルを形成していた。当時の人々は、ジゴマを観る、聴く、そして読むことで、この娯楽を体験していたのである。

中川村には、映画常設館がなかった。映像としてジゴマを観た村民は、映画常設館がなかった。それでは、小説のほうはどうだったのか。『会報』には、中川村青年会主催の講演会に招かれた当時の君津郡長藤川佑が、青年会員に向かってジゴマの小説について注意するよう述べている講演が掲載されている。ここで藤川は、

青年には「健全なる読物」が必要だとした上で、「常識を逸したるもの」、「不良なる小説」は「無益有害」であり、「近来流行のジゴマ」は「極めて危険なる読物」だと警戒している²。

この講演会が行われたことだけをもち、中川村青年会員たちが実際にジゴマ関連の小説を読んでいたということはできない。しかし、当時の君津郡長がわざわざ中川村までやってきて、青年会員たちに向かつてジゴマを警戒するよう呼びかける。この事実は、怪盗ジゴマという存在が、青年会員たちの間にも知れ渡っていたことを示しているといえよう。

2 美的生活

「美的生活」という言葉は、一九〇一（明治三四）年八月に、評論家の高山樗牛が雑誌『太陽』に「美的生活を論ず」を発表し、話題となったものである。「個人の本能充足を説いた」³高山の美的生活論は、発表後の数年間、流行語となった。『会報』においては、村上米蔵の論説に、この言葉が登場する。

高山の美的生活論は、「本能満足主義・快樂主義」として世間一般に理解されるが多かったが⁴、村上の理解もほぼ同様であった。村上の「美的生活」という論説には、「美といふことを煎じ詰ると是は一種の快樂に過ぎない」と、美的生活を批判した政治学者でキリ

スト教徒の浮田和民が著した『社会と人生』（北文館、一九一二年）のなかの一節が引用されている⁵。また、同じ村上の論説である「虚栄の競争」には、「美的生活とは、至誠推譲分度勤勞の道徳的生活をいふのである」とある⁶。「至誠推譲分度勤勞」とは、第一章で述べたように、二宮尊徳の高弟・富田高慶が報徳主義の思想を広めるために用いた四つの用語である。村上はこの四つの用語の實踐をいえず、真の美的生活とは、個人の快樂であり、私心を捨てる美的生活とはいえず、真の美的生活とは、誠実であり、私心を捨てる美的生活とは、実践のなかにこそあったのである。率先して勤勞に励む、報徳主義の實踐のなかにも、若者の教育に懸命であった村上は、『会報』を通じて当時の流行語であった美的生活を青年会員たちに紹介し、その言葉の「真に」意味するところを伝えようとした。その言葉を受け止め、彼らが「快樂主義」に走つてしまふような事態が生じることを防がなければならぬという村上の思いがあったのである。

3 デモクラシー・改造
「デモクラシー」と「改造」、この二つの言葉は、大正期、特に一

九二〇（大正九）年前後に流行した言葉である。これらの言葉も、美的生活と同様に、村上の論説にみることが出来る。

村上は、「大戦後の一、二年はデモクラシー志想が世界の隅々隈々まで波及した。」「改造は世界的流行語である。」と、この二つの言葉を紹介している。そして、デモクラシーにおいて必要なのは、「各個人の自覚と自己節制」であるとし、「民主主義に於て最大の憂いは、徒に権利を主張して義務責任を軽んじて自ら制することを知らないことだと述べている。

ここで村上は、デモクラシーや改造を否定したかっただけではない。村上は、「労資問題、普選や言論の自由を要求する等を改造と称へ得るならば、改造は時と所とを問はず必要欠く可からざるもの」とも述べている。村上があくまでも固執していたのは、権利を主張し、その権利を行使する者が、どれだけ権利に伴う責任を自覚しているかということであつた。

個人の責任や自覚にこだわる村上のこのような姿勢は、決して村上の独りよがりというものではなかつた。『会報』に寄稿された青年会員の論説にも、村上と同様の姿勢をみる事ができる。村上が選挙で中川村青年会の会長に選ばれた際、副会長に選ばれた長谷川若名は、「自身の論説のなかで、「改造は世界の大気運である。」と認めたと上で、「改造は先づ自己の脚下からでなければならぬ。自己の心身

からでなければならぬ。」と述べている¹⁰⁰。
村上と長谷川は、年齢こそだいたいぶ離れているが（村上が三〇才年長）、どちらも当時は中川村青年会の役員であり、指導者の立場であった。デモクラシーと改造という流行語を前にして、青年会の会長と副会長の二人がともに権利の主張には、個人の責任が伴うということとを述べていたのである。
このように、流行に関することが記されていた『会報』の記事をみていくと、中川村青年会の役員たちは、会員たちが流行をそのまま真に受けるのではなく、まずは自身の修養に努め、その上で流行に對峙してほしいと考えていたことが分かる。青年会の役員たちがこうした考えを、『会報』を通じて会員たちに語りかけていたということは、中川村には『会報』に掲載される以前からすでに流行に関する情報が伝わっていた可能性が、あるという点では中川村の人々のメディア利用環境について明らかにしていくことにする。

二 村民のメディア利用

1 新聞
序章で紹介したように、有山輝雄は福島県梁川町の新聞販売店に

真会が開かれていた¹⁴。東京朝日新聞社主催のものは、一回だけ開かれたことが確認できる。一九二六（大正一五）年一月一日に開催され、当日は中川青年会の各部会の役員や、上宿部会員が進行を手伝った¹⁵。よる「映画会」というものも開かれていた。千葉県社会教育課の協力を得て、一九三四（昭和九）年六月三〇日に横田小学校にて開催された映画会では、『御国の栄』、『御国を護れ』、『黎明』という作品（製作年や内容など詳細は不明）や、『アニメーション』という作品が上映された¹⁶。映画常設館のなかった中川村では、このような上映会という形で、映画が上映されていた。中川村には、新聞販売店がいくつか存在して話を新聞に戻そう。中川村には、新聞販売店がいくつか存在していた。上記の販売店以外に、村上新聞店という店もあった¹⁷。販売店が存在していた以上、中川村に一定の新聞購読者がいたことは間違いない。新聞の読者層については、不明である。ただ、村の名家である葛田家、長谷川家、村上家に連なる者が新聞を販売していることから考えると、少なくとも村の名家出身の者たちは新聞を購読していたのだろう。少なくとも村の名家出身の者たちは新聞を購読してはいたのだろう。東京朝日新聞社、東京朝日新聞社、東京朝日新聞社主催の映画上映会が開

聞はのにおし度何なだ変て機使か
 が『感そて中かかのそわも材用か
 村東謝らいた川新のそわも材用か
 民京をくたも村聞のそわも材用か
 に日表開の村で販新のそわも材用か
 読日す催の開かを売販のそわも材用か
 ま新このでかを達をのそわも材用か
 れ聞と主はれ成をのそわも材用か
 て『にあなくいたして何年か主催の
 いた』あ目的、たは、販売促進とい
 可『東たは、何年か主催の
 能京と思販売促進とい
 性朝日新聞』とい
 は日新聞』とい
 極めるとい
 の高とい
 であ
 1。中央報徳会
 8。中央報徳
 中央報徳
 機

聞が村民に読まれていた可能性は極めて高いといえる。代表する新

の感謝を表すことにあつたと思われ、以上のことは、日頃の中川村で

おそらく開催の主眼は、何年か一回という程度のものであつた。

して、川村で開かれていた新聞社主催の映画映会は、一時期中

度の新聞販売を達成して、新聞社である。見込める村、価値のある程

何か。それは、ある程度、新聞販売が見込める村、価値のある程

なければならぬ。企業体である新聞社にとつて、価値のある程

だ。その価値がある村と見なす。このイベントを開く

変。そのない。この事実、新聞社側が中川村を、このイベントを開く

て。新聞社の名を掲げた上映会が開催されて、いとう事実

機材を貸して、いた。社名を掲げた上映会が、開催されて、いとう事実

使用許可を与えた。実際には、主権といつても新聞社側が販売店に社名

かれていた。実際には、主権といつても新聞社側が販売店に社名

会とは、日露戦後の一九〇六（明治三九）年四月に設立された半官半民の国民教化団体で（設立当初の名称は報徳会、中央報徳会となるのは一九一二年）、地方改良運動を推し進めていた内務省の官僚が理事の名を連ねていた。この団体の機関誌である『斯民』は、報徳主義の思想を全国に広めることを目的として発行されていたものであつた¹⁹。

地方改良運動が展開されている時期に設立され、報徳主義の實踐を目的としていた中川村青年会としては、『斯民』を定期購読するといふのは当然のことであつた。一方、昭和初期を代表する大衆雑誌である『キング』や、『中央公論』、『改造』といった総合雑誌は、中川村青年会の目的を遂行する上で必要だと思われなかつたのか、青年会として購入することはなかつた。

一九三〇年代の前半頃から、農村部で最も読まれていたとされる雑誌は『家の光』であつた²⁰。この農村向けの大衆雑誌を、中川村では村上米蔵が読んでいた。村上は、『家の光』に掲載されていた記事を、『会報』にそのまま転載していたのである。

『家の光』から『会報』に転載された記事の事例としては、二つ確認できる。先ず一つは、読者に生活の改善を求めるとして、その実現には一家の収入と支出のバランスを考へることが重要だと述べられていた「風呂釜式暮し方」である²¹。もう一つは、一家の家

計を上手に切り盛りするのために、主婦に習慣的な記帳を求めた「世帯持を一変させる記帳の習慣」であった²²。どちらの記事も、『家の光』に掲載されたのと同じ月に、『会報』に転載されている。村上が『家の光』を読んだのと上記の記事を『会報』の読者に紹介したいと思ひ、すぐに転載したのである。

『会報』は、青年会の会誌なので、主婦向けの記事を掲載するのは一見おかしいように感じられる。実際、『会報』は村のなかでは青年会員のみ配布されており、掲載された記事は会員に向けて書かれてゐるものがほとんどであった。

しかし、それが即ち『会報』の読者は全て青年会員であるということの意味してはいない。会員が『会報』を家に持ち帰れば、会員の家族もそれを読む可能性はあった。村上は、村の共同一致を目標として中川村青年会を設立した。その青年会の会誌である『会報』の読者には、会員以外の村民も想定していたとしても不思議なことはない。

村上が『家の光』を読んでいたことは、『会報』をみれば明らかにできる。しかし、ほかの村民の雑誌購読の状況については明らかにしないことは困難である。ただ、村上が『家の光』に掲載された記事は『会報』に転載することと、『会報』の読者は『家の光』を購入しなくても、『会報』に転載するだけで、『会報』の読者は『家の光』を購入しなくても、その一部分だけを読むことはできた。また、『家の光』を購

年会は『斯民』を定期的に購入していたので、青年会員はこの雑誌を読むこともできた。もちろん、転載部分は村上の恣意的な選択であり、定期購読されていた雑誌はあくまでも青年会の目的に沿うものに限られていたということで、読み手には選択の余地など全くなかった。しかし、たとえそれが限定的なものであったとしても、中川村青年会と『会報』が雑誌を読む機会を村民に提供していたことは、紛れもない事実であつた。

3 書籍

書籍は、中川村青年会に青年文庫が設置されており、青年会の活動の一つとして読書が奨励されていた。一九一三（大正二）年六月二五日、中川村青年会臨時総会が開かれ、「中川村青年会青年文庫規程」（全一〇条）が可決された。この規程は、『会報』第五〇号（一九一三年六月一日）に付録として掲載されている。青年文庫設置の目的は、「国民道徳並ニ地方農業者ニ必要ナル知識技能ヲ与フル」ことであつた（規程第二条）。青年文庫は、横田小学校に設置され、その管理も小学校が担当した（同第三条、第五条）。青年会員でなくても、青年文庫の閲覧・貸出は可能で、貸出の期限は一ヶ月であつた（同第六条、第七条）。青年文庫の蔵書は、漸次青

年會が増設していくものとされ、そのための書籍の寄贈、もしくは書籍購入費に充てる寄付金は常時受け付けていた（同第九条、第一〇条）。

○ 村の図書館ともいえるこの青年文庫の利用形式は、小学校内という一定の場所での利用するものから、青年会の各部会を巡廻する文庫形式（毎月の役員会で書籍を交換）へと後に変更となる。変更された時期や理由について断定的なことはないが、推測するところは可能である。

一九二四年（大正一三）年四月一〇日、役員会にて青年会のなかに学芸部・社会部・体育部が新設されることと決定した。その際、学芸部の副部長に就任した会員の山中信太郎は、「青年会文庫掛」にも就任した²³。これにより、青年文庫の管理は横田小学校から青年会の学芸部へと移された。一九二六年五月一〇日に開かれた役員会では、その場で書籍の交換が行われた²⁴。これは、巡廻文庫の実施が確認できる最初の事例であった。

以上のことから、早ければ一九二四年以降、遅くとも一九二六年以降には、青年文庫の巡廻が始まったとみてよい。この時期に、青年文庫が巡廻形式へと変更された理由としては、関東大震災の影響が考えられる。

一九二三年（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災は、中川

は、青年文庫の一覧である。蔵書の数は、徐々に増えていったもので、常時これだけの数を揃えていたということではないのだが、かなり規模といえよう。

木更津に図書館が設置されたのは、一九二九（昭和四）年五月二一日である。開館当初の蔵書は、三九六冊であつた²⁶。図書館ですら、当時の蔵書はこの程度である。まして、中川村には図書館はなかつた²⁷。青年文庫は、充実していたといつてよい。

表3をみると、青年文庫に入っていた書籍は、やはり青年会の目的を達成するための助けとなる内容のものが目につく。例えば、青年会の基本理念となつていた報徳主義関連のもの（富田高慶『報徳論』番号27、福住正兄『報徳結社問答』番号29）や、農村振興関連のもの（久本弥『最新養兔の智識』番号101、大橋清蔵『丁抹文化の真髓と農村教育』番号144、安田格『養豚秘訣』番号174、各務武雄『農村の窮乏と農家経営の合理化』番号176）などである。

ほかに、農本主義者の著作や青年団運動の指導者の著作（山崎延吉『青年の自覚』番号59、田沢義鋪『青年団の使命』番号149）、キリスト教徒による著作（山室軍平『青年への警告』番号9、留岡幸助『二宮尊徳と剣持広吉』番号53、賀川豊彦『死線を越え

て『番号125』などもあった。国民に読書ブームを巻き起こした
円本も、青年文庫に入っていた（『修養全集』番号105、『朝日常
識講座』番号135および番号153）²⁸。
表3には、それぞれのおよび番号の発行年は記さなかったが、青年文庫
に新しく加えられていく書籍は、その当時の最新のものが多かった。
例えば、青年文庫開設直後の一九一三年八月の時点で文庫に入って
いた番号1から36でみると、番号1の井上友一『自治之開発訓練』
と番号25の前田宇次郎『地方青年の手引』は、どちらも青年文庫
開設の前年に刊行されたものである（前者が中央報徳会、後者が大
成会出版部発行）。
も、番号39の浮田和民『生活戦術』は一九一九（大正八）年刊行
（『実業之日本社』、番号40の安田善次郎『意志の力』は一九一六年
刊行（『実業之日本社』）であった。最新書籍の収集という村の図書館
としての役割を、青年文庫が果たしていたことが分かる。
書籍の購入方法については、中川村に書店が存在していたことを
確認できていないので、不明な点はあるのだが、青年文庫開設当初
は郵送によっていないので、不明な点はあるのだが、青年文庫開設当初
する店が中川村に存在していたのかもしれないし、青年文庫開設当初
版社に注文していたのかもしれない。

注文という方法以外にも、書店のある都会に青年会員が出向いて書籍を購入してくる場合もあったと思われる。なぜなら、青年会の活動の一つに東京への視察があり、この視察の参加者が書籍を購入してくることがあったからである³⁰。また、村上米蔵は、青年会の視察とは関係なく、個人的に東京に行くことがあり、その際に書籍を購入していた可能性も考えられる。

青年会員による青年文庫の利用状況はどうだったのか。前出の山中信太郎は、青年会文庫掛に就任してから一年間、会員の巡廻文庫利用の記録をつけていた。そして、『会報』にはその記録に基づき、文庫利用者上位六人の名前が掲載された。それによると、第一位は田嶋金治、第二位は吉田修一郎、第三位は小沢茂、第四位は大野栄、大塚多喜松、相川重三の三人であった³¹。

第一章に掲載した「表2 中川村青年会歴代会長・副会長（一九二〇年度以降）」を参照してもらえば分かるように、この上位六人の内四人が後に青年会の会長ないし副会長に就任している³²。選挙で青年会の役職者に選ばれるような人物は、読書を好んでいたということがある。ただ、この順位が青年文庫の利用回数によってつけられたものなのか、ただ、この順位が青年文庫の利用回数によってつけられたものなのか、記されたか、もしくは利用冊数によってつけられたものなのか、記事には記されていないのは分らない。実際にこの六人がどのくらい青年文庫を利用していったのかは分らない。

一九二八（昭和三）年五月当時、学芸部の部長であった山中泰三は、青年文庫を積極的に利用するよう青年会員に求めている³³。この山中の訴えをみると、会員の青年文庫の利用は、あまり思わしくなかったのかもしれない。ただ、山中は青年文庫を管理する学芸部の部長なので、利用者が多かったにも関わらず、さらなる利用を求めてこうした訴えをしただけという可能性もある。いずれにしても、程度は会員に利用されてきたことは間違いなく、青年文庫があらゆる中川村青年会に設置されていたことは間違いない。青年文庫には、全ての村民に書籍を利用する機会を提供していた。青年文庫には、青年会向けの教養書のほか、一般的に人気の高かった円本も入っていた。まさに、村の図書館として、その役割を果たすだけの能力（蔵書）を青年文庫は有していたのである。

4 ラジオ
正一（四）年であつた。この前年の東京に加えたのは一九二五（大正一四）年であつた。翌一九二六年には、三つの放送局は解散・統合し、新たに社団法人日本放送協会が誕生した。村上天蔵は、早くからラジオの受信契約を結んでいたようで、自

宅で放送を聴いていた。『会報』には、ラジオで放送された新渡戸稲造の講演や、ロンドン海軍軍縮会議の様子などについて紹介する記事が掲載されていた³⁴。

一九二〇年代後半の全国のラジオ普及率は五%前後で、一九二九年度は五・四%、千葉県だけみると五・二%であった³⁵。中川村はどうであったかというところ、一九二九年度末の時点で、受信契約をしていたのは四一人、これが一九三〇年度末になると二四人に減り、一九三一年度末は変わらず二四人であった³⁶。受信契約者が大きく減った理由は定かではないが、時期を考えると、恐慌が影響していたものと思われる。

昭和初期の恐慌により、中川村がいかなる打撃を受けていたのか、具体的に示す記録は残されていない。ただ、近隣の富岡村や平岡村では、財政の緊縮化が図られていた。また、楢葉村と神納村にいたっては、財政の合理化を目的に、一九三二（昭和七）年七月一日に両村の合併を断行している（これにより昭和町が誕生）³⁷。君津郡内の村がこのような状況であった以上、中川村にも不況の波が押し寄せていたことは間違いないだろう。ラジオの受信契約者の減少は、中川村における恐慌の影響を示す貴重な統計資料といえるのか、さしれない。

中川村のラジオ普及率だが、一九二九年当時の中川村の現

住人口は二四八〇人、中川村の一人当たり平均人数を六・〇七人とすると³⁸、当時の戸数は四〇九戸（小数点第一位を四捨五入）となる。一九二九年に中川村でラジオの受信契約をしていた四人が全て別の世帯の場合、普及率は一〇%（小数点第四位を四捨五入）となり、全国や千葉県の平均と比べるとかなり高い数値となる。

ただ、翌年度からは受信契約が減っているので、それらのラジオ普及率を一九二九年度と同じような条件で計算すると、一九二九年度と比べると、だいたい普及率が落ち込んだ。この二年度の全国のラジオ普及率は、六・一%、八・三%、千葉県では五・二%、全国の平均よりは低かった³⁹。この時期の中川村のラジオ普及率は、全国平均より低く、千葉県平均よりはやや高いということになる。この後、ラジオの普及率は全国的に増加していき、戦時中の一四二年度には全国平均より高い五・七%、千葉県の四九・九%、中川村ではどちらの平均より若千高い五四・二%に達していた⁴⁰。

このように、中川村では数値が落ち込んだ時期はあるものの、ラジオの普及率は千葉県平均と比べると、やや高い数値を記録している。その要因としては、中川村青年会が開く青年会の活動が敬老会がある。中川村青年会の活動が敬老会がある。中川村青年会の活動が敬老会がある。

では、村上のメディア利用について、もう少し具体的にみていこう。一九〇八（明治四一）年四月に大隈重信の提唱により設立された民間の啓蒙団体に、大日本文明協会というものがある。同協会は、主な事業として外国書籍の翻訳・出版を行っていた⁴²。同協会により翻訳・出版された書籍は非売品で、協会に会費を納めた会員のみ配本するという制度を採用していた⁴³。村上は、同協会が翻訳・出版した書籍を『会報』のなかで紹介している。村上は、同協会の会員だったのである⁴⁴。

村上が『会報』のなかで紹介したのは、イギリス人のウィリアム・ハルバット・ダウソンが執筆した『現代独逸の発展』という書籍である。一九一〇（明治四三）年七月に、大日本文明協会から刊行されたものであった。

『現代独逸の発展』は、七八六頁もある大著で、ドイツ発展の要因を経済・教育・思想など様々な方面から分析したものである⁴⁵。村上は、同書が刊行されると、すぐにこの書籍のことを『会報』で取り上げた。その記事のなかで村上は、同書の内容を簡潔に紹介しながら、教育や學術の発展によりドイツは成功したということを青年会員たちに伝えている。そして、日本もドイツのように成功するには、その前提条件として、至誠や共同一致といった戊申詔書の精神が不可欠となることを忘れてはならないと、青年会員たちに訴え

た⁴⁶。最新の書籍を入手し、それをすぐに青年会員たちに紹介する。村上の心のなかにあった知識や情報への欲求には、それを入手したいという思いだけでなく、それを村の若者たちに伝えていきたいという思いも含まれていたのである。『現代独逸の発展』のような最新の書籍に記されていた新しい知識だけでもなく、近世以降、士族を中心に親しまれていた伝統的な知識も村上は欲していた。それは、漢文の素養である。村上は、孟子や孔子を好んでおり、『会報』にはその名が何度も登場する⁴⁷。また、村上は頼山陽の『日本外史』を讀んでいたよう場で、こちらにも『会報』にその名が登場する⁴⁸。漢文で記された頼山陽の『日本外史』は、明治期を代表するベストセラーの一つであり、新時代の人々の知識への欲求を花開かせたことで知られている⁴⁹。村上も例外ではなく、『日本外史』に触れていた。村上は、明治期の知識人が嗜んでいた漢文を学ぶことにも関心を抱いていたのである。このように、村上は古今東西のあらゆる知識や情報を入手するのに対して、貪欲な姿勢を示していた。そして、入手した知識や情報は、すぐに青年会員たちに伝えるために、『会報』を通じて発信されていった。村上にとってのメディア利用とは、自身だけで完結す

るものではなく、その体験が青年会員たちと共有されることで、よ
うやく完結するものであつたといえる。

おわりに

以上、『会報』に流行に関する情報を記された記事が掲載されるこ
とを可能にしていた要因を探るべく、中川村のメディア利用環境に
ついて述べてきた。本章の考察で明らかのように、中川村では村民
がメディアを利用する際に、中川村青年会が大きな役割を果たして
いた。新聞に関しては、その利用の機会を村民に提供していたのは
籍、ラジオにあり、『会報』であつた。つまり、村民のメディア利
用はかなり部分を支えていたのは、中川村青年会であつた。村民の
メディア利用を支えていたのは、結果としてその時代の流行
行に関する情報を中川村青年会の役員たちが世間一般の理解の
くもない。中川村青年会の役員たちが、世間一般の理解の
が中川村に広がることを警戒していたことは、本章の第一節で述べ
いた通りである。役員たちは、青年会が村民のメディア利用を
いたにも関わらず、流行という新たな情報に警戒するよう青年会員

さて、本章の最初に述べたように、村民が村の外から情報を得るにはいくつかの方法がある。本章では、その一つであるメディアの利用について考察してきたが、村の外に村民が出向くという方法もあった。そこで本章では、最先端の情報の発信地であった東京と、中川村青年会がいかに向き合っていたのかを考察していくことにする。

1 以下、ジゴマに関する記述は、永嶺重敏『怪盗ジゴマと活動写真の時代』（新潮新書、二〇〇六年）に依拠している。
2 「講師 君津郡長 藤川佑」（『会報』第五一号、一九一三年七月五日）。この記事は、藤川の講演を村上米蔵が筆記したもの。
3 長尾宗典「姉崎正治と雑誌『時代思潮』―日露戦争期における「ロマンティズム」の変容―」（『メディア史研究』第二〇号、二〇〇六年五月）。
4 野村幸一郎「明治の社会ダーウィニズムと美的生活論争」（『國語文』第七六七号、一九九八年七月）。美的生活論に関する研究としては、このほかに長尾宗典「高山樗牛における「美学」の転回―「美的生活」論提唱の思想的根拠―」（『年報日本史叢』二〇〇四年一二月）がある。
5 「美的生活」（『会報』第五七号、一九一四年二月一〇日）。
6 「虚栄の競争」（『会報』第六〇号、一九一四年五月一五日）。
7 「人の問題」（『会報』第九八号、一九二〇年六月一五日）、「改造」

記外青と村村²七²前¹一袖²述²て社²は²役²三²は²一²
 しに年記立図⁷六⁶。三ケ⁵浦⁴浦⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 て小会さ図書⁷二木⁶四号⁵袖⁴浦⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 し学副て館長⁷。津⁶、浦⁵、浦⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 ま校副て館長⁷。津⁶、浦⁵、浦⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 っは会い、と⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 たな長、小⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 のい、もし⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 であ、あ、校⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 ろのっ、校⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 う記た、校⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 。事鈴、の⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 は、巖⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 ほ、あ、の⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 か、の、村⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 の中、川⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 話を、村⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 中川、村⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 村は、小⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 と田、小⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 間小、学⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 違学、校⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 え校、以⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²
 て以、る⁷。朝⁶、日⁵、編⁴述²て社²は²役²三²は²一²

² 〇 〇 有山輝雄『近代日本のメディアと地域社会』（吉川弘文館、二〇〇九年）によると、福島県梁川町で最も売れた円本は、中川村青年会の青年文庫にも入っていた『朝日常識講座』であったという（二〇〇八頁）。

² 〇 〇 中川村青年会青年文庫記事」（『会報』第五二号、一九一三年八月一日）。

³ 〇 〇 「視察東京方面 其五 監督者長谷川良次」（『会報』第二四号、一九一一年四月一日）。この記事は、長谷川良次の談話を村上米蔵が筆記したもの。

³ 〇 〇 「文庫利用者」（『会報』第一五〇号、一九二五年五月一日）。この記事の執筆者は村上米蔵だが、順位をつけていたのは山中信太郎である。

³ 〇 〇 一年度の会長である相川重三は、表2では相川十三となつてゐるが、表2の注で金子政次の名前の表記について記したように、『会報』にはしばしば名前の誤記が確認できる。そのため、相川重三と相川十三は同一人物と考えてよいだろう。どちらが正しい表記かは不明である。

³ 〇 〇 山中泰三「学芸部の希望」（『会報』第一八六号、一九二八年五月一日）。

³ 〇 〇 新渡戸の講演は「平和と宗教」（『会報』第一八七号、一九二八年六月一日）。ロンドン海軍軍縮会議の様子は「天地の間和らぐ春日かな」（『会報』第二〇六号、一九三〇年三月一日）に、「ラジオの年度別全国受信者数・普及率（100世帯当り）」、

表3 中川村青年会青年文庫一覧

番号	著者(編集者)名	書籍名	番号	著者(編集者)名	書籍名
1	井上友一	自治之開発訓練	2	矢崎玄八	農業報徳論
3	パンゼー(三浦徹訳)	開発の燈	4	後藤新平	処世訓
5	内務省地方局編	世界六大強国国勢比較	6	金森通倫	貯金のすすめ
7	加藤直士	小林富次郎	8	ロポルトソン・ニコル (柏井園訳)	基督伝
9	山室軍平	青年への警告	10	山室軍平	平民の福音
11	松原英一	基督教概観	12	内村鑑三	商売成功の秘訣
13	アンナ・シューエル (本田増次郎訳)	聊語(くろうまものがたり)	14	堺利彦	家庭夜話
15	中里介山	中江藤樹言行録	16	森恒太郎	義農作兵衛
17	秋山悟庵	貝原益軒言行録	18	大屋徳城	日蓮上人
19	宮崎右夫	貧之朋友	20	西洞たみの訳編	偉人に及ぼせる婦人の感化
21	穂積八束	憲法大意	22	読売新聞社編	公德養成之実例
23	桑名伊之吉	害虫及益虫	24	尚武会編	陸海軍隊須知
25	前田宇次郎	地方青年の手引	26	富田高慶	報徳記
27	富田高慶	報徳論	28	福住正兄	二宮翁夜話
29	福住正兄	報徳結社問答	30	根本正訳編	欧米女子立身伝
31	櫻井鷗村	リンコン物語	32	後藤寅外	公民
33	徳富猪一郎	吉田松陰	34	本間鶴治	通俗家庭理科
35	森鷗外	ファウスト	36	徳富健次郎	みづのたはこと
37	新渡戸稲造	自警	38	増田義一	青年と修養
39	浮田和民	生活戦術	40	安田善次郎	意志の力
41	新渡戸稲造	一日一言	42	大倉喜八郎	努力
43	森村市左衛門	奮闘主義	44	中村八郎	最も利益の多い決して失敗せぬ此れからの養鶏
45	岡村猪之助	稲作改良增收法	46	山室軍平	平民の福音
47	ジョサイア・ロイス (鈴木半三郎訳)	忠義の哲学	48	ケーラー (前田長太訳)	人格と徳育
49	安芸雲山	教育道話	50	福井松湖	心行
51	川尻宝岑	教育勅語成申詔書道話	52	松村介石	修養録
53	留岡幸助	二宮尊徳と剣持広吉	54	金森通倫	信仰のすすめ
55	内務省地方局有志編	田園都市	56	国府種徳	義勇之本領
57	国府種徳編	修養の燭光	58	武岡充忠、井口丑二	廣村
59	山崎延吉	青年の自覚	60	田子一民	米國に於けるアルコール戦
61	上野他七郎編	自治の新思潮	62	村田宇一郎	地方経営の道德的基礎
63	村田宇一郎	民育雑話	64	奥寺竜溪訳	歐洲大戦美談
65	留岡幸助	砲後の人	66	横山達三	改造の精神
67	大島正徳	公民道德	68	村上專精	人生の行路
69	入江操	優良町村及青年団 産業組合視察之葉	70	近藤行太郎、 今野拓民	選奨さるゝまで
71	不明	郵税(本書の存在を 確認できず)	72	安田格	最新実験養鶏秘訣
73	香坂昌孝	農村青年の辿るべき道	74	天野雄彦	油島千本松
75	天野雄彦	石川翁山居	76	天野雄彦	島の一蝶
77	山崎延吉	田舎草紙	78	山崎延吉	農村小話
79	山崎延吉	優良町村之建設	80	村田宇一郎	町村自治会の組織及活動
81	後藤静香	修養団要義	82	堀内新泉	義侠の人
83	山中奉太郎	三人の告白(本書の 存在を確認できず)	84	増田義一	思想善導の基準
85	増田義一	青年と修養	86	大槻磐溪	訳註近古史談
87	丘浅次郎	煩悶と自由	88	新井友吉	日本一の百姓となるまで
89	チューダー・ジョンズ (植木謙英訳)	生活より宗教へ	90	尾崎五平治	実験蔬菜園芸第2編 (葉菜栽培法)
91	農村黎明会編	農村経済学の話	92	日本放送協会関東 支部編	趣味講座:ラジオ講演
93	金子白夢	体験の宗教	94	大日本雄弁会編	賀川豊彦氏大講演集
95	佐佐木信綱	和歌入門	96	永井威三郎	日本稲作講義

番号	著者(編集者)名	書籍名	番号	著者(編集者)名	書籍名
97	松村松年	進化と思想	98	末弘巖太郎	嘘の効用
99	加藤咄堂ほか	新しき修養精神の糧	100	伊藤痴遊	西郷南洲 前編
101	久本弥	最新養魂の智識	102	桜雲閣主人	外交秘話:明治史実
103	古瀬伝蔵	百姓だつて人間だ	104	太田正孝	経済読本
105	大日本雄弁会講談社編	修養全集 全巻	106	簡易修養局編	簡易生命保険創始 十周年記念講演集
107	横手千代之助	住居と營養	108	田山花袋	古人の遊跡
109	沢柳政太郎	禁酒読本	110	錦木徳二、庵原良介	炭酸肥料講話
111	鶴見祐輔	中道を歩む心	112	高田早苗	半峰昔ばなし
113	本庄栄治郎	近世農村問題史論	114	吉田絃二郎	静かなる土
115	永井亨	社会読本	116	新渡戸稲造	世渡りの道
117	尾崎五平治	実験蔬菜園芸第3 (根菜類栽培法)	118	鶴見祐輔	英雄待望論
119	深作安文	思想問題研究	120	帆足理一郎	社会と人生
121	岡崎一	農界の現状より見た 自給肥料糞肥及堆肥	122	深作安文	社会創造への道(本書 の存在を確認できず)
123	浜口雄幸、井上準 之助	経済難局の打開と金 解禁の話	124	椎名竜徳	病める社会
125	賀川豊彦	死線を越えて 上中下巻	126	細田民樹	或兵卒の記録
127	室伏高信	日本はどうなる	128	池崎忠孝	米国怖るゝに足らず
129	大佛次郎	山嶽党奇談	130	高島素之	論・想・談
131	島崎藤村	藤村隨筆集	132	幸田露伴	蒲生氏郷、平将門
133	朝日新聞社	消費節約と国民経済(本 書の存在を確認できず)	134	大日本雄弁会講談社	落語全集3冊
135	朝日新聞社	朝日常識講座 7冊	136	尼子止	平民宰相浜口雄幸
137	ウィッテ(荒川実蔵訳)	ざれどロシアは敗れたり	138	小笠原長生	大海戦秘史
139	朝日新聞社政治 経済部編	朝日政治経済叢書第1 海軍縮小の話	140	野間清治	体験を語る
141	レマルク(秦豊吉訳)	西部戦線異状なし	142	佐藤紅緑	富士に題す
143	吉村清尚	地方増進の方法と理論	144	大橋清蔵	丁抹文化の真髓と 農村教育
145	生活改善同盟会編	実生活の建直し	146	千葉県農会	やり様で儲かる農業の 実例
147	千葉県農会	農業経営の秘訣は(本書 の存在を確認できず)	148	梅沢少佐	軍艦物語(本書の存在 を確認できず)
149	田沢義鋪	青年団の使命	150	赤木健	人生を笑つて解いた 一休和尚
151	田沢義鋪	改革教育講座(本書の 存在を確認できず)	152	岡田道一	スポーツ衛生
153	朝日新聞社	朝日常識講座 4冊	154	不明	産業合理化
155	不明	農村と共同組合(本書の 存在を確認できず)	156	佐藤鉄太郎	吾等は日本人なり
157	石丸梧平	創造原理論集	158	吉田絃二郎	吉田絃二郎全集
159	小笠原長生	愚ひ出を語る	160	土田杏村	人生論
161	浜口雄幸	隨感録	162	久門盛三	水田裏作物栽培法
163	東京朝日新聞 経済部編	明るい里暗い村	164	高木斐川	政治及社会思想
165	田沢義鋪	私を感激せしめた人々	166	徳富猪一郎	時勢と人物
167	山崎延吉	親愛なる青年へ	168	林忠昭	こやしをやるには
169	与謝野晶子	人間往来	170	長田幹彦	満州問題と秘密室(本書 の存在を確認できず)
171	不明	鍛錬編(本書の存在を 確認できず)	172	武森山治	景気転換策としての金 輸出再禁止
173	駒井徳三	大満洲国建設録	174	安田格	養豚秘訣
175	富田文雄	新農村の建設	176	各務武雄	農村の窮乏と農家経営 の合理化
177	永田秀次郎	高所より観る	178	永田秀次郎	建国の精神に還れ
179	安部磯雄	産業奉還論	180	尾崎行雄	世界審判の岐路に立つ 日本
181	本間俊平	新生命の獲得	182	不明	新時代の農村経営(本書 の存在を確認できず)
183	実業之日本社編	新満洲国読本	184	東郷平八郎	愛国読本
185	相馬御風	良寛さま	186	本間俊平	心霊の戦場から
187	賀川豊彦	神と苦難の克服	188	桜井忠温	戦はこれからだ

番号	著者(編集者)名	書籍名	番号	著者(編集者)名	書籍名
189	野依秀市	軍部を衝く	190	池田宣政	父と子
191	真山青果	乃木將軍	192	賀川豊彦	一粒の麦
193	松岡洋右	青年よ起て	194	仲摩照久	満洲国の解剖
195	清谷閑子	不死鳥	196	荒木貞夫	非常時認識と青年の覚悟
197	山崎光美	毛用毛皮用兎の飼い方	198	松岡洋右	非常時に際して全國民に訴ふ
199	内田浩	篤農家奮闘記	200	加藤熊一郎	雄弁法講話
201	武者小路実篤	二宮尊徳	202	武者小路実篤	大石良雄
203	資源局編	米國総動員計画	204	科学画報社	航空の驚異

注

- ・『会報』の記事上で、著者(編集者)名・書籍名が誤って表記されているものは、修正した。
- ・山室軍平『平民の福音』が2つあるが(番号10、46)、前者は購入、後者は寄贈によるもの。
- ・増田義一『青年と修養』も2つあるが(番号38、85)、こちらは両方とも購入したもの。
- ・『朝日常識講座』も2つあるが(番号135、153)、これはシリーズものの円本なので、同一の書籍を複数購入しているわけではない。
- ・番号は、筆者が付けた。
- ・「中川村青年会青年文庫記事」(『会報』第52号、1913年8月15日、番号1~36掲載)、「青年会文庫」(『会報』第100号、1920年8月5日、番号37~45掲載)、「寄贈」(同前、番号46~57掲載)、「図書」(『会報』第105号、1921年1月20日、番号58~71掲載)、「寄贈」(『会報』第117号、1922年4月2日、番号72~73掲載)、「図書購入」(『会報』第120号、1922年7月15日、番号74~85掲載)、「寄贈」(『会報』第162号、1928年5月15日、番号86掲載)、「図書購入」(『会報』第178号、1927年9月15日、番号87~104掲載)、「受寄贈」(『会報』第192号、1928年11月15日、番号105~107掲載)、「中川村青年会巡回文庫新規購入書籍左の如し」(同前、番号108~122掲載)、「図書購入」(『会報』第202号、1929年11月15日、番号123~135掲載)、「中川村青年会文庫昭和五年十二月買入書籍左の如し」(『会報』第217号、1931年2月15日、番号136~155掲載)、「中川村青年会文庫買入書籍」(『会報』第232号、1932年5月15日、番号156~172掲載)、「書籍購入」(『会報』第243号、1933年4月1日、番号173~180掲載)、「新規購入書籍左の如し」(『会報』第244号、1933年5月15日、番号181~187掲載)、「購入書籍」(『会報』第253号、1934年3月15日、番号188~204掲載)より作成。

な心境がエネルギーとなることで、自分たちの村の改造、例えば地主と小作との従属関係の改善、農村の文芸活動の活発化などに農村青年たちが目を向けることになつたこと、そしてそのエネルギーは村の改造だけに与らざらず、農村青年たちの国家意識の高揚を呼び起こし、昭和初期の国家主義台頭を支える基盤となつたことを指摘している³。

民運動のなかで、デモクラシーと国家主義のどちちらも向かう可能性がある基盤が内包されていたことを明らかにした。ただ、この運動を担つていた農村青年たちの心情の背景に、都会熱という近代日本を象徴する現象が存在していたことを解明したのも、研究であり、近代日本の特徴、地域社会、あるいは関係を考える上で基本となる研究であつた。ただ、地域社会、あるいは農村と一口にいつても、それぞれの村々で事情が異なるのは、さもない。近代日本の地域社会には、不可欠である。実態を考へるには、さらなる事例研究の積み重ねが不可欠である。

べたように、中川村には時代最先端を示す流行に関する第二章で述べたように、中川村には時代最先端を示す流行に関する第二章で述べたように、中川村青年会の存在であつた。この中川村青年会の活

動の一つに、東京への視察があった。情報の発信地である東京に、
 中川村青年会は、心を寄せた。情報の発信地である東京に、
 メディアを通じて、流行りに関する情報を把握して、中川村青年会
 員たちは、その流行を生み出し、都会に抗する東京の村の意識
 が出ていたか。東京への視察や、都会に抗する東京の村の意識
 創出という形で、東京と向き合っている。それは、同時に、近代日本の地
 域社会における都会熱の実態を解明する一つの事例研究となる。

一 村に残る村民の心情

さて、その中川村において、第一章で述べたように、川村の問題
 が発生して、いた。明治四一〇年、川村の人口は、一九四〇
 昭和一五〇年、明治四一〇年、川村の人口は、一九四〇
 昭和五〇年、明治四一〇年、川村の人口は、一九四〇
 中川村の人口推移を示したのが表4である。この事実だけを
 るように、中川村の人口は、微増を続けている。この事実だけを
 みれば、中川村は、都会への人口流出と微増を続けている。この事実だけを
 ように思える。ただ、本籍人口が微増を続けた一方で、一九二〇年

分に姉ヶ崎駅に到着、電車で千葉駅まで向かい、千葉駅に着いたら電車を乗り換え、佐倉に着いたのは午前九時五〇分であった。当時は、まだ横田駅が開設していなかったもので、中川村を出発して最初に姉ヶ崎駅で電車で乗るまでに二時間半もの時間を要していた。

堀田農事試験場では、稲作試験や肥料試験の様子を見学したほか、家禽、果樹、蔬菜、草花などについての生育・栽培方法などの説明を受けた。見学を終えると、佐倉で昼食を済ませ、次の目的地である県立中山園芸学校へと向かった。中山には夕方に着いたが、見学を行うには遅かったもので、この日は見学を行わず、近くの法華経寺を参拝し、宿泊先に泊まった。

翌一九日、早朝から園芸学校を見学。ここでも果樹、蔬菜、草花の栽培方法の説明を受けた。午前中に見学を終えると、いよいよ東京へと向かった。

午後一二時三〇分、両国駅に到着した一行は、電車を乗り換え上野駅に向かい、さらに乗り換えて西ヶ原農事試験場の最寄駅である王子駅に到着した。一行は、試験場で見学を頼むも、翌日にしてほしいと言われたのでこの日は見学をあきらめ、宿泊先である日本橋小網町に向かった。

翌二〇日は、早朝より西ヶ原農事試験場にて見学を行う。雨量計や地温計、熱度計といった各種計器類の説明や、外国の農具、近年

は不明だが、第一章で述べたように、葛田家は「横田の七人士の一角であり、村の三役（村長、助役、収入役）を輩出していた名家であった。そのため、葛田藤助も村の有力者の一人であったと考え、よいだろう。この視察の目的は、西多摩郡の吉野村青年会の活動の様子を見学することであった。四月一日、午前七時四分に横田駅を出発した一行は、午後一時には新宿駅から立川方面へ向かい、吉野村最寄の日向田駅に着いた。だが、相当な長旅であった。途中、電車が遅れたようだが、吉野村では、吉野村青年会の会長が不在であったため、役場の収入役から青年会の活動内容の説明を受けた。その内容は、会員による共同耕作、簡易図書館の創設、敬老会の実施、定期的な貯金、早起きの奨励、時間の厳守、娯楽としての運動会や文芸活動の実施など、一行は、午後六時には吉野村を出発しているもので、村で説明を受けていたのは一時程度であった。午後六時三十分、日向田駅からは新宿行きの電車に乗り、午後八時四三分に新宿駅に到着、この日は、翌二日は、靖国神社参拝、遊就館見学、明治神宮参拝、浅草散策、そのまま浅草にて宿泊というコースであった。最終日の三日は、午

の 入 過 見 と
は っ 程 聞 に
無 て に には 聞
理 き お 長 広
な て く い ぬ
時 い な て ぬ
代 た か 、 間
で 。 で 鉄 要
あ も 、 道 する
っ は 東 網 社
た や 京 だ 会
。 、 け が 見
村 村 け 学
の 発 なく 距
若 信 さ 、 離
者 され メ 的
た ち デ は 決
に 情 ィ して
都 報 ア も 人
会 を 確 の 間
意 実 に 中
識 する な 川
す 中 川 村
る な 川 村
な 川 村
い 川 村
う 川 村

妥 此 村 を と 旅 出 葉 前
当 の の の し 行 こ 発 県 一
だ の 視 滞 視 参 参 参 参 参 参 参
と の 察 在 察 察 察 察 察 察 察
い の 時 時 時 時 時 時 時
え 本 間 間 間 間 間 間 間
よ 当 が 加 加 加 加 加 加 加
う の の 者 者 者 者 者 者 者
。 の 短 者 者 者 者 者 者 者
目 くなる 事 前 前 前 前 前 前 前
的 は こと にも 把握 して いた はず である とう 考 える の が
二 日 目 以 降 の 観 光 に あ っ た と 考 える の が
妥 当 だ と い え よ う 。

くなる者が続出してしまふという恐れもあるのだが、都会に比べて
娯楽の少ない農村に住む青年会員たちに見れば、東京視察とい
う非日常体験を提供してくる青年会の存在は、ありがたかったに
違いない。以上のように、中川村では青年会の活動の一つである視察によつ
て、村の若者たちは東京という都会に触れる経験をするこゝとなつ
た。東京視察の主な目的は、農事関連施設や他村の青年団の様子を
見学することであつたが、実際には観光名所を巡る旅行の意味合い
が強かつた。東京視察は、青年会員にとつては社会見学であり、娯
楽でもあつたのである。青年会員たちは、都会に対していかなる
認識を抱いていたのか。次節では、中川村青年会員の都会観を
いくことにする。

三 中川村青年会員の都会観

1 村上米蔵の都会観
先ずは、中川村青年会の設立者である村上米蔵の都会観について
みていこう。青年会の設立後は、村の若者を教育することがライフ
ワークとなつていた村上は、青年会員たちが報徳主義を實踐し、将

来の村を支える人材へと成長していくことを願っていた。そのためには、青年会員たちが内向きになるのではなく、広い視野を持った人間になることが必要だと村上是考えていた。国民が列強というものを強く意識していた時代である。村上も、外国、特に列強、西洋を強く意識していた。

村上は、「西洋諸国が古来常に文明の路に進んで止まざるは、列国各其境を接し、自他相互に弁難攻撃し、切磋琢磨の功を積むに拠る。」、「東洋諸国が文明に後れたるは自ら尊大にして、他と交らず、漫りに他を排斥して独りよがつて居た為である。」と述べており、日清・日露戦争を経て、今後日本が列強と伍していくためには、外に目を向けていくことが肝心であるという認識を示していた。だからこそ、中川村青年会には新刊の書籍をそろえた青年文庫が必要だったのであり、村上は自分が得た知識や情報を『会報』を通じて青年会員たちに伝えていたのである。

このように、青年会員たちに向かつて外に目を向けることを奨励していた村上だが、都会に對しては警戒感を抱いていた。村上が恐れていたのは、都会の退廃的な雰囲気、青年会員たちが感化されることであつた。村上は、「東京なぞで謂所不良少年は、みな悪友の感化でありました。」と述べており、東京は若者の氣風を変えてしまふ

ところだと認識していた¹¹。村上にしてみれば、都会で生じるスキャンダルなどは、「精神界墮落の縮図」だったのである¹²。

しかし、こうした村上の警戒にも関わらず、中川村青年会では東京視察が行われていた。前述したように、近代化が進む時代状況において、東京の情報を完全に遮断することなど不可能であった。そもそも、村上自身、個人的な旅行で東京を訪れることがあった。『会報』には、村上が東京で観劇した曾我廼家五郎劇の内容が掲載されている¹³。曾我廼家五郎劇自体は、青年会員が広い視野を持つというのと全く関係はないのだが、東京で行われていた演劇の内容を紹介するというのが、東京を無視することなどできないと村上が理解していたことの表れだといえよう。

将来の村の発展を担うことができ、且つ時代に取り残されない知識を持つ若者を育てるためには、青年会員たちが都会に目を向けることを止めることはできない。しかし、その都会の退廃的な雰囲気、青年会員たちが感化されることは防がなければならぬ。村上にしてみれば、この状況は悩ましかったことだろう。結局、都会を無視することはできないと理解していた村上は、自身が抱いていた都会に対する警戒感を青年会員たちに伝えることで、彼らが都会の雰囲気、染まることのできなかつたよう、青年会の顧問として彼らを見守り続けることのできなかつたのである。

た金子政次は、東京でモガとモボを實際に目にしたようで、「電車の中、タクシの内、モダンボーイ、モダンガールてな人間共の芳香紛々たる空気を漂はせ居り候。金縁眼鏡に洋服の紳士。流行のソルを手に粉飾に粉飾を重ねた淑女の容姿。その美と田園に歛取る瘡々たる黒き腕、黒き足顔等の赤裸々な肉体美とは、何れが勝れたりと申べきか。」と述べている¹⁵。

華美な服装で着飾る都会の若者と、汗水流して農業に従事する農村の若者を比較して、金子が後者のほうが美しいと考えていたことは明らかである。また、「確に東京は我國の文明を代表してゐると言ひ得よう。」と、東京の先進性を認めながらも、「東京市民が我が民族の特質の凡てを代表してゐるのであるか。」として、東京のモダンボーイを「享樂に憧れてゐる。その代表」と批判している青年会員もいた¹⁶。

東京は日本を代表する都市であり、そこから生み出される最新の文化については青年会員たちも認めていた。實際、青年会員たちは観光名所や博覧会、百貨店といった東京の文化に触れ、東京の先進性は経験として実感していった。しかし、文化の発展に享受するあまり、過度な欲求を満たさうとして、東京の者たちよりも、地道に農業に従事する自分たちのほうが人間として勝つていると青年会員たちは考えていたのである。

ただ、この優越感は感情的なものに過ぎなかつた。青年会員の一人は、「現今の社会状態を観察すれば、彼の中等教育を卒へたる者が、巡査となり、職工となり、大学を卒へても就職難で遊んで居る者が、少なくない。況んや農村で僅か高等小学や補習教育位の程度で都会に走つたとて、(中略)都会の競争に堪へず劣敗者となるは寧ろ当然の既決と云はねばならぬ」と述べ、都会に比べて教育環境に恵まれ、断言していない農村青年たちが都会に行つても、能力的に通用しないと断言している¹⁷。

厳しい指摘であるが、同じように都会の競争の激しさを述べている。青年会員はほかにもいた¹⁸。また、「農村の労働固より神聖である。併し工場労働都会労働悉く尊い。農は国の基なり。田舎は根幹にして都会は枝葉なりと称し、殊更に農村の労働のみ神聖なる如く鼓吹するは、余りに狭義に失せずや。」と、農村だけでなく、都会も国家を支えていると冷静に述べる青年会員もいた¹⁹。

感情的には、農村の生活のほうが都会の生活よりも優れていると思いたいというのが、青年会員たちの本音であつたらう。モボやモガに対する彼らの優越感は、偽らざる気持ちであつた。しかし、実際に東京の先進性を彼らも認めざるを得ず、激しい競争にさらされてゐる東京の人々の生活や労働を評価しないわけにいかなくなつた。「田舎は根幹」、「都会は枝葉」ばかり主張していても、自分たち

の生活に寄与するものなど何も無いことを、彼ら自身理解していたのである。

それでは、青年会員たちには都会に対して感情的な優越感に浸ることではか、自分たちのコンプレックスを紛らわす方法がなかったかという、そんなことはない。彼らは、村の娯楽を充実させることと、都会に負けない農村生活を作り出そうとした。「農村に相当な娯楽を設ける事」は、農村振興につながるかと考えたのである²⁰。

先の引用で、農村青年が都会に行っても競争に敗れるだけと述べていた青年会員切替弥一は、「農村の文化事業の完備や娯楽機関の施設に意を注ぎ、依て以て都会の青年男女をも農村に吸引する位にしなければならぬ。」とも述べており、娯楽の充実こそが都会に対抗するための農村振興策であると主張していた²¹。

村の娯楽を充実させることで、自分たちの生活を有意義なものにする。それにより、感情的だけでは無い、実感として得られる優越感を生み出すと青年会員たちは考えたのである。青年会の顧問である村上米蔵は、退廃的な東京の悪風に青年会員たちが染まることを危惧していたが、会員たちは東京に感化されるどころか、東京を知ることでもむしろ東京に対する対抗心を強めていた。それだけ、青年会員たちにとって東京は大きな存在であり、彼らの東京に対するコンプレックスもまた大きかったということであろう。

四 娯樂としての文芸活動と運動會

1 中川村青年會と文芸活動

村の娯樂の充実といつても、当然ながら都會と同じようなことをするわけではない。映画館やダンスホール、博物館や美術館、博覧會や百貨店、そのような施設を當時の中川村に建設することなどで、青年會員たちは建設するつもりもなかつた。先にみた東京への視察も、青年會員たちにしてみれば貴重な娯樂であつたが、もつと日常的に楽しめる娯樂として彼らが考へたのは、文芸活動であつた。青年會員の一人は、「私は農村青年の娯樂としては文芸がよいと思ふ。」と述べている²²。

文芸活動については、村上米蔵も好んでいた。『會報』には、小林一茶や松尾芭蕉の俳句、明治天皇と昭憲皇太后の御製、古歌などが掲載されていた。また、村上自身も和歌や絵を嗜んでおり、自身の作品を『會報』に頻繁に掲載していった。

村上の作品を、いくつか紹介してみよう。「氣もつかず・目にも見えぬど・いつのまに・ほこりのたまる・たもとなりけり」(・は引用者、以下同様)、「居眠りて・あだに夜毎をすごさずに・目は交わりげめ・読書そるばん」、「人心・悪しき道には入り易し・朱に交わり

て・赤恥をかく¹・²・³。和歌というよりも、標語といった印象である。青年会員たちの教育に心血を注いでいた村上らしい作品といえよう。絵は、自然の風景や草花を描いたものが多かった。このように、『会報』の編集兼発行者である村上自身が文芸活動を好んでいたこともあり、『会報』には青年会員たちが娯楽の必要性を訴え始めた大正末期以降になると、『会報』には青年会員たちの和歌や詩が頻繁に掲載されていくことになる。彼らの作品を、いくつか紹介してみよう。「泥つきし・野良着ぬぎつゝ・夕土間に・明日の仕事を・父に語れり」、「畑隅の・草にひそみて・昼を啼く・こうろの声や・秋立ちにけり」、「心よく・理髪を終へて・今一度・鏡の前に・立ちてみにけり」、「つぎくに・飛ひたつ蝗・追ふ子等の・影長々と・夕づきにけり」²・⁴。どの作品も、何気ない日常の一コマを詠んだものである。

日常とはやや離れた場面を詠んだ作品もある。一九二九（昭和四）年三月三〇日に開かれた中川村青年会第二一回定期総会において、副会長に当選した相川雅男は、当選直後に腸チフスで亡くなってしまう。この相川を悼むために、詠まれた歌が以下のものである。「人の世の・運命すべなし・はたとせの・短きよはひ・友はかへらず」、「真剣に・土に立ちたる・雄々し・男のかへらぬ・春をたぐうらむなり」²・⁵。また、入営する友人のために詠んだ歌もある。「兵とし

て・立つ日は近き・友とゐて・炉辺の話は・つきざりにけり」²⁶。
草の葉末にも／星の光の蒼さにも／若い娘のひとみにも／そして私
の心にも／いつのまにやら秋は来た／おゝ自然よ／静寂な秋よ／色
づいた桐の葉が風もないのに／ハラくと又ハラハラと／草むらの虫
の声は啼々と／人の腸を断つ寂寞な秋の夜よ／かくして秋は来た／
見る限り聞く限り／静寂な秋は来た。」「／は引用者、改行を意味す
る」²⁷。

このような文芸作品を『会報』に投稿する青年会員のなかには、
雅号を持つ者もおり、彼らが文芸活動を娯楽として日常的に楽しん
でいたことが分かる。青年会員の一人で、村上米蔵の孫の村上勉は、
「秋は決してスポーツを以て独占すべきではない。」「万物沈思の
秋」と述べている²⁸。日頃の喧騒を忘れ、心静かに文芸活動に耽
る。和歌や詩の創作に励む時間は、青年会員たちにとって心休まる
ひと時であつたことだろう。

2 中川村青年会と運動会

文芸活動に安らぎを覚える青年会員がいる一方で、当然ながら体
を動かすことのほうが楽しいと考える青年会員もいる。そのような
青年会員たちが活躍する場が運動会であつた。中川村では、例年一

○月から一月ごろに青年会と横田小学校との合同で運動会が開催されていた。中川村青年会において、横田小学校との合同による運動会が初めて開催されたのは一九一三（大正二）年四月である。²。青年会の定期総会の後に開かれた。会員同士のオリエンションのようない意味合いで開かれたのだらうが、青年会において運動会が定着することはなく、その後には中川村青年会も所属する君津郡青年団連合会（一九一四年一月二五日設立）主催の運動会に代表者が参加するのみで、中川村青年会としてはしばらく運動会を開くことはなかつた。それから横田小学校の一九二四（大正一三）年一月八日、中川村青年会は横田小学校と合同で「陸上競技会」を開催し、以後は毎年一月から一月ごろに合同運動会が開かれるようになった。³。分らない。ただし、この年の一月三〇日から一月三日まで、明治神宮の造営と明治神宮競技場の完成を記念して、第一回明治神宮競技大会が開催された。中川村でも運動会を開こうという話になったのではないだろうか。周知の通り、明治神宮の造営には全国の青年団員が奉仕として参加しており、中川村青年会からも二人が一〇日間参加していた³。村の若者が造営に関わった明治神宮を記念した競技大会が開かれる。

あつた³。²。『東京日日新聞』、『東京朝日新聞』の二紙が村内で読まれていた可能性が高かつたことは第二章で述べた通りだが、『萬朝報』の購読者も、村内には少なからずいたのである。

運動会が終わると、『会報』にはその感想が寄せられた。各種目の結果分析、優勝した部会への賞賛、成績低調だった部会へのエールなどが記されたものである³。感想に対しては、別の会員からその分析結果に異議を唱える反論が寄せられることもあつた⁴。スポーツの結果に対する感想なので、どちらが正しいということではないが、わざわざ異議を唱えるということ、それだけその青年会員が運動会に熱中していたということである。

このように、運動会の詳細な模様は『会報』に掲載され、成績結果の感想を寄せる青年会員や、その感想に異議を唱える青年会員、さらには大会前に出場選手の能力を分析し、結果を予想する青年会員などもいた⁵。出場選手だけでなく、観戦する側の人たちも運動会に参加していたのである。

中川村の運動会で活躍する青年会員は、君津郡青年団連合会の運動会に代表選手として参加する。また、一九二五年には君津郡青年団連合会第二分会が組織され（正確な発足日は不明だが、一月か二月に組織されたものと思われる）、この分会に所属する五村（中川村、中郷村、根形村、平岡村、富岡村）の青年団の合同による運

動会も開かれており、そこにも代表選手として参加する。『会報』には、こちらの運動会の成績も掲載される。村民の注目の的となる代表選手は、肉体的にも精神的にも大変だっただろうが、応援する側は毎年楽しかったことだろう。文芸活動同様、運動会も村の娯楽として大きな役割を果たしていたのである。

文芸活動や運動会以外にも、浪曲師を招く娯楽会、青年会員が演説の能力を競い合う雄弁会（一位には優勝カップが授与される）、青年会と婦人会が協力して開き、唱歌や手品、蓄音機、常磐津、ラジカセなどの余興が披露される敬老会、婦人会員が作った手芸品を廉価で販売する即売会など、村の娯楽を創出すべく様々な催しが行われていた。こうした活動の一方で、「劇を、レコードを、舞踊を、唄を、音楽を、フィルムを楽しむことの出来る時は果して何代の後か。一日も早かれと願ふのであります。」というように、都会を象徴する娯楽が中川村でも日常的に楽しめる日が早く来ることを願う青年会員もいた³⁶。

ただ、これを述べた青年会員は、青年会の文芸活動や運動会に対して不満を抱いていたのではない。将来的には、演劇や映画を楽しむことができる施設が建てられるほどの村に中川村が発展するよう、青年会員には「不断の努力」が必要であるということを述べているのである³⁷。この青年会員の意見も、都会を意識するからこそ出

てきたものだといえるだろう。都会に負けない農村生活を目指すために、青年会員を中心とする。村の村民たちは娯楽を作り出し、文芸活動や運動会、そのほか様々な催しに村民は参加し、それを楽しんでいた。生み出された村の娯楽は、確実に農村生活の充実につながった。存在しておられる。しかし、村の娯楽と都会の娯楽との差は、歴然と存在しておられる。青年会員たちはそれを自覚していた。それでも、農村で現に生活する者として、また将来の中川村を担う若者として、この差を埋めるにはどうすればよいのか、青年会員たちは模索して、この差を埋めるには

おわりに

以上、中川村青年会が都会といかに向き合ってきたのかをみてきた。鉄道網の整備、メディアの普及と、近代化の波が中川村にも確実に押し寄せるなか、青年会の役員は都会の情報遮断するのにはなく、会員たちに都会を「正しく」理解してもらおうと考えていた。青年会の活動の一つとして行われた青年団の見学には、役員が引率するなか、農事関連施設や他村の青年団の見学に加え、観光名所である神社や街を訪れてきた。青年会の創設者であり、顧問として終生青年会員たちを見守り続けた村上米蔵は、東京の悪風に青年会員

都会熱の度合いは、その地域と都会との距離に関連している。指摘して来た。東京と隣接する千葉県に位置していた中川村は、都市近郊農村だといえよう。本章では、大門のようには小学校卒業生の進学状況からその地域の都会熱を解明かしたわけではないが、中川村も都市近郊農村らしく、都会熱は決して低くはなかつた。村上にいても、青年会員たちにして、都会を意識した上で、村の振興を考えており、村に残った彼らもまた、都会熱と無縁ではなかつたのである。

もう一つ、大門の指摘との関係でいうと、中川村には村民に対して強力な支配力も持つ大地主が存在しなかつたので（「横田の七人」のように、一定の影響力を持つ地主は存在していたが）、地主と小作人との間で目立った対立はなく、都会への反発から生じるエネルギーは、中川村では地主と小作との関係改善といったことに向けられるのではなく、村の娯楽の創出に向けられていた。大門は、日清・日露戦争期に生まれた若者は、都会と農村との格差や農村の文芸活動に関心が強いとも指摘しているが、まさに中川村青年会員たちがこれに当てはまっていた。

国家主義との共鳴という点では、農産物の供給こそ「内面的報国の道」だと述べる青年会員がいたことから分かるように、彼らの都会への対抗心が後の国家主義台頭の基盤となつた可能性があること

は否定できない。ただ、この点は青年会員たちの対外観や天皇観などを含めた複合的な視点から考える必要がある。第四章と第五章で述べる。本章で述べた青年会員たちの都会へのコンプレックスと、次章以降で述べる青年会員たちの対外観と天皇観がいかに絡み合い、昭和の戦時体制への底流となるのか。この点については、本論の最後に明らかになるだろう。

1 大門正克「農村から都市へ——青少年の移動と「苦学」「独学」」(成田龍一編『近代日本の軌跡』9 都市と民衆) 吉川弘文館、一九九三年)、竹内洋『立身出世主義「増補版」——近代日本のロマンと欲望』(世界思想社、二〇〇五年)。難波功士『人はなぜ「上京」するのか』(日経プレミアシリーズ、二〇一二年)は、人々の上京に込めた思いを時代別に紹介することで、「近代日本における上京の一〇〇年史」(三頁)がいかなるものだったのか簡潔に整理している。
 2 大門正克「学校教育と社会移動——都会熱と青少年——」(中村政則編『日本の近代と資本主義——国際化と地域——』東京大学出版会、一九九二年)。
 3 大門正克『明治・大正の農村』岩波ブックスレット、一九九二年、三六〇六二頁。

⁴ 『千葉県統計書』を基に、この表を作成したのは古宮千恵子氏である。
⁵ 積田賢治「拓殖博覧会に現れたる五殖民地の農業 其二」(『会報』第四五号、一九一三年一月一五日)、「見学旅行」(『会報』第九六号、一九二〇年四月二〇日)、「見学旅行」(『会報』第一〇八号、一九二一年七月二日)、相川雅男「旅行雑記」(『会報』第一六七号、一九二六年一月一五日)、金子政次「東京見学旅行記」(『会報』第一九〇号、一九二八年九月一五日)。上記の「拓殖博覧会」とは、一九二一年一月一日から一月二九日までの期間、上野公園にて開催されていた明治記念拓殖博覧会のことである。
⁶ 前掲金子「東京見学旅行記」。
⁷ 積田賢次「視察報告」(『会報』第四一号、一九一二年九月一五日)。この記事の執筆者の積田賢次と、注5の積田賢治は同一人物である。ここまでに何度かその事例を紹介しているように、これも『会報』にて散見できる名前表記の誤りの事例の一つだと思われる。
⁸ 積田賢次「視察報告 其二」(『会報』第四三号、一九一二年一月一五日)。
⁹ 葛田藤助「見学旅行記」(『会報』第一一〇号、一九二一年九月一日)。
¹⁰ 「雑纂」(『会報』第四五号)。
¹¹ 「中川村青年会の主義精神」(『会報』第九五号、一九一七年八月五日)。
¹² 「断ず祈るべし」(『会報』第一一四号、一九二二年一月一〇日)。

¹ 笑ひを忘れた人々」(『会報』第二五二号、一九三四年二月一
¹ 日)。山口義次「青年の意気」(『会報』第一四九号、一九二五年四月
¹ 五日)。金子政次「東京見学旅行記 其三」(『会報』第一九三号、一九
¹ 二八年一月五日)。T・M生「現代青年につぐ」(『会報』第一九五号、一九二九年
¹ 二月五日)。弥一「青年の都会病」(『会報』第一五一号、一九二五年六
¹ 月五日)。当時は、高等教育を受けた若者たちがいかに就職難に苦し
¹ んでいたかは、町田祐一『近代日本と「高等遊民」―社会問題化する
¹ る知識青年層―』(吉川弘文館、二〇一〇年)に詳しい。
¹ 高橋三郎「農民の自覚」(『会報』第一六〇号、一九二六年三月
¹ 五日)、小澤清「生命の尊さ」(『会報』第一九五号)。
¹ 山中泰三「私達の使命」(『会報』第一七四号、一九二七年五月
¹ 五日)。吉田保「農村振興策ニ就テ」(『会報』第一四〇号、一九二四年
² 五月五日)。青年の都会病 其二」(『会報』第一五二号、一九二
² 五年七月五日)。希望と感謝」(『会報』第一六五号、一九二六年八月
² 五日)。上から順番に、『会報』第八号(一九〇九年一月一日)、同

第二三号（一九一一年三月一五日）、同第六五号（一九一四年一月
 五日）から順番に、『会報』第一九八号（一九二九年七月一五日）
 掲載の若林耕村の作品、同第二〇〇号（一九二九年九月一五日）掲
 載の若林耕村の作品、同号掲載の小澤清一の作品、同第二〇一号（一
 九二九年一月一五日）掲載の若林富世の作品。
 う二首とも若林富世「相川君を悼む」（『会報』第一九八号）とい
 う。『会報』第二〇五号（一九三〇年二月一五日）掲載の若林富世
 の作品。若林富世は、『会報』第二〇六号（一九三〇年三月一五日）
 に「は兵營の友へ」というエッセイも寄せている。
 一月一五日）。走馬灯のたゞ中へ」（『会報』第二一四号、一九三〇年
 一月一五日）。陸上競技会」（『会報』第一四六号、一九二五年一月
 一五日）。千葉県君津郡中川村青年会沿革及事業ノ梗概」（『会報』第
 一七号、一九二二年四月二日）。
 三「横田小学校。中川村青年会聯合運動会」（『会報』第一五六号、
 一九二五年一月一五日）。
 三九「陸上競技会を見る」（『会報』第一五七号、一九二五

3 8	3 7	—	3 6	3 5	年 二	3 4	年 一
前 掲 大 門 『 明 治 ・ 大 正 の 農 村 』 五 六 〜 五 九 頁 。	同 日 前 。	日 前 。	田 誠 治 『 郷 土 を 愛 せ 』 『 会 報 』 第 二 四 号 。	M K 五 日 鐵 面 皮 氏 の 寄 書 を 見 て 『 会 報 』 第 一 五 九 号 、 一 九 二 六	月 一 日 。	芳 星 一 五 日 。	二 月 一 日 。